

A dirt path winds through a dense forest. The path is narrow and made of dark brown earth, with some fallen leaves scattered on it. The forest is lush with green foliage, including tall trees with thick trunks and dense bamboo thickets on either side of the path. The lighting is bright, suggesting a sunny day, with sunlight filtering through the leaves.

アラン

わが思索のあと  
(下)

高村昌憲訳

今度は、詩人たちについての結論を述べたいと思います。彼らは、私が最も貴重と思っている観念まで私を導きましたし、今でも導いてくれます。それは詩人たちだけが人間のあり方や、出来ることと出来ないこと、取分け事物と人間との間に見出された調和によって真の肉体を描く幸福というこれらの活動を、直接的に考慮に入れていることです。『イリアス』は神々の源泉です。何故なら私が、鳥の囀りのようにギリシア語の文法を気にすることなく聞けるまでになった豊富な読書のお陰で、やがて私は人間たちと共に走る神々を見たからです。それらの人間たちと同様に、私も人間としての素晴らしい神的な瞬間を追求しようとしたからです。しかし、神々を嘗て面と向かって見たのは誰だったのでしょうか。更に、面と向かって夢を見たのは誰だったのでしょうか。何時の時代でも、あるが儘に良く見られて来た宇宙は、忠実で純粹です。如何なる欺瞞もありませんでした。しかし、人が少しも見ていなかった処や辺り一面に神の飛翔が不意に現れます。私はそれ故に想像力の生誕を見ました。想像力は生誕でしかありません。何故なら想像力は、その始まりの状態が私たち全ての観念でしかないからです。それ故に全ての神々は過去のものです。しかし何時も私たちの隙を窺っています。神々は、注意力という短い目覚めを待ち受けます。神々が来るのはこの時です。全くホメロスによって成長したプラトンは、人間としての自然な活動によってホメロスを拒絶します。しかし、神であったこの短い瞬間を人間の中に十分残しています。そして、その瞬間こそが始まりです。そうです、農民が甜菜の中から立ち上がり純粹な言葉を理解する時、農民は一度に超自然的になります。この愛の貯えには注意して下さい。何故なら全てはそれを使い、農民自身もそれを良く引き受けているからです。全ての友情の法則は、それが黄金時代の思い出によってしか継続しないものです。その思い出は幸いにも記憶になって、私たちの全ての瞬間をそれらに先行するものの次に絶えず従っているのです。人間の歓迎や驚くべき歓待とはその様なものです。人間は家を出て行きますが、少し前に家に這入ったのは神です。神々は決して人間に変装しません。寧ろ人間の仮面を脱ぎます。以上は私が『イリアス』の砂漠の中で教わったことです。『オデュッセウス』の幾つもの道や十字路の中でも同様に教わりましたが、もっともここには反省と神々に対しての慎重さがより一層多くあります。ミネルヴァは、その様な神として現れて来ません。但し、如何にすればその様な神として現れるのでしょうか。存在するもの、人間、鷲、梟以外に何も現れません。又、オデュッセウスの行動は少しも興奮させませんし、神々は隠喩での姿となり、同じく伝説となって行きます。古代ローマの詩人ウェルギリウスは知性としてのその歩みを記しています。何故なら彼が最早神々を見ていないことを、人々は良く理解しているからです。従って、宗教から芸術への移行や、神から神の心象への移行が、手で触れて眼で見るように正しいことであっても、私は彼の本をそれ程読みませんでした。それ以上にもっと注目に値するものはホラティウスで、彼の抒情短詩は個性的であると言えます。何故なら彼は恐らく得体が知れない雄山羊や、直ぐに消える沢山のヴィーナスでしかない牧神を一瞬出現させながら、小さな神々としてホメロスを表しているからです。彼の木や泉や洞窟は、田園の神々で鳴り響きます。以上の古代の詩人たちから何時も私は、アクセントもリズムも受け取らなかったと言えるでしょう。しかしながら、その発音は全く慣習的ですが

、それを信用しさえすれば、私の心の中にある何かのリズムを創らずには置きません。そしてそれらの絶対的な親を変化させないで、ゆっくりとした言語の変化を短縮させることでしかない変形に従った別のリズムに照応していると私は思います。しかしながら私は、私たちの詩人たちにもっと良く耳を傾けるべきだったでしょう。それとも昨日誰かが私に言ったように、私と同時代の仲間である真の詩人は、未だ現れていなかったと信じるべきでしょうか。

私は一九二三年頃にポール・ヴァレリーを知るようになりましたが、それは彼の詩を通してであったと言いたいと思います。それまでは辛うじて、名前だけ知っていた位です。そして知り合いになるまでには更に時間がかかりました。聖別された著名な作家たちを愛するのに不都合があるなら、それは現代の作家たちに最早眼を向けないことです。ヴァレリーの詩「ナルシス断章」は先ず移り気効果を私に与えましたが、間もなく忘れて仕舞ったことを私は思い出します。「海辺の墓地」は最後から二つ目の節が私を貫き、その最後の一行は私には最も美しいものに思えました（静寂にも似た擾乱のさなかに）。ある日、私はこの節を教室で朗読したところ、多くの生徒たちがこの詩の全節を知っているようでした。そして、恭しく「若きパルク」の写しを私に見せたのです。この難解な詩人に対する滑稽な論争が私に態度を決めるように求めた時、それ故に半分以上私の注意力は目覚めていました。私はその日、全く信用していなかった二、三人の文筆的傭兵隊長のような者たちの素顔を見ました。その時、私には理由が分かりました。嫉妬には決して基礎になるものが無いから私を苛立たせるのです。何でもないことに気難しくなる者たちは、本当にそれが存在したのではなく、単に見せかけようとしただけです。要するに、私は傷付いた白鳥の擁護に奔走しました。白鳥は高く飛んでいましたが、傷付いていました。多分、人間の愚かさに傷付いたのです。その点で彼は間違っていました。問題になっている連中がもし望んだなら、難解で有名な詩を褒めたかもしれませぬ。私が良く同類の者たちに例外なく思っている考えは、彼らが単に馬鹿な賭けをするなら大変な愚か者に長くなっている、という観念によって修正されます。それでも騒動は収まりました。平均的読者が恐れられていた声を聴かせたのだと私は推測しています。そして私は武装しました。

私はこの詩人のために大変な注意力が必要であることを認めます。しかし、ホメロスに対しても同様に必要です。読むことを仕事にしている殆ど全ての人々にとって、ホメロスは計り知れず不可解であることに私は気付きました。私はなおも言いますが、ふざけて言うなら学識ある人々が屢々私のものを二行以上読むのを拒むのも、同様の理由からです。その立派な動機を私は知っています。変化を告げたり要求したりするものは、怪しまれるのです。しかも大作家は読まれる以上に有名です。私はその影に避難します。それは実際の楽しみの結果でした。つまりヴァレリーの詩集『魅惑』の欄外に書いたなぐり書きで、これらの作品の注釈を公表したのですが、これらの作品は少しも注釈する必要がありません。従ってその注釈はこの詩人への讃辞でしかありませんでした。そして、もう一つの讃辞は『若きパルク』で、それは私が最後に手を入れたものです。私はこの種の仕事が余り好きではありません。しかし、最も美しい芸術を尊敬すること、低級な人を黙らせることを学びました。この仕事は完成しました。けれども私が学ぶことも終わりました。私は詩人の最後の秘密と呼ぶものが気に入ることも発見しました。最後の秘密とは何でしょうか。私は何時もそこから遠くにいるようです。しかし、私自身の財産目録を作る前に、休息によって力強い思想家であるこの詩人に関する一言をもう一度言いたいのです。私が嘆く

のは、彼が忍耐強い謎の編曲者でしかないと常に信じさせている極めて自然な謙虚さです。少なくとも彼が時々靈感を受けるという告白を、私はもぎ取らなければなりません。そして、それこそが美しい演奏です。

ところで私が詩から学んだものや、散文からも学んだものとは何でしょうか。それは私が期待した以上のものでした。そして一大景観を作っています。私が余り考察しなかった外観の元には宗教があります。何故なら私は詩を人間の言葉の偶然の出来事と見做すことが出来ないからです。反対に、それは規則的です。人間が自分自身と立派に語り合うことが出来るためには、やはりこれらの閉じられていて変わる事のない形式が必要です。全ての思考の構築のために起こるものは、言葉のためにも起こります。もしも上部が欠ければ、下部も欠けます。人が節度を持って話したくなくなったなら、最早唸り声を上げているだけです。昔からそうでしたし、今でもそうです。もしも韻文を朗読させなかったなら、普通の言葉さえも発音させられるか私には疑問です。そしてこの方法は、自分自身のことを思考するように動物を呼び戻す方法なのです。それ故に私は要約して言いますが、教養の無い思想は全くありませんし、崇拜の無い思想もありません。何故ならそれは同じ言葉であるからです。換言すると、もしも言葉を尊重しないなら、自分を尊重することも決してありません。そこから出発して私は重要な結果を幾つか認めました。例えば劇的な詩は、本当に思考と感情の学校でしたし、今でもそうです。しかしながら、私は屢々演劇を熱心に考えましたけれども、少しも考えが纏まりませんでした。この万人のための詩、行動を伝える詩句のこの歩み、そしてそうです、喜劇においてさえも、人間の登場を告げるこの荘厳な様式の全てそれらは高等文法や手紙文の範例以上の何かのものに私には見えました。手紙文でも既に大したものです。人間というものは時々人間らしく表現したいのです。その点に関しては少しも自分自身を信じません。それに大衆作家は殆ど何時も祝婚歌の詩人並みです。そして私は、この職業をルアンで既に見ていました。この職業が滑稽であることは容易に示されるでしょう。しかし人は、即興がどれ程滑稽であるのかは考えないということです。一人ひとは美しい言葉の模範を求めています。でも、その模範は言いたいことを説明するには、大変に具合が悪いと考えるどころではなくなり、反対に、人がそのことを大袈裟に言った時にしか良く分からないのです。コントは独り言を言う人間が自分自身の最も微妙なニュアンスの感情を、千年前の詩に屢々見出すことに注目しました。

人間が上部からでしか形を整えないというこの考えは、計り知れないものがあります。何故なら、形式とは先ずは空虚であります。私たちの思想を表してそれを思い出させてくれるものであることを人は理解するからです。その効果は言葉であり、そして絶対的に言葉の破局でしか良く理解しない演劇で倍加されます。何かが語られるか否かで、初めて劇になります。演劇にとっては、いかんともしい難いことです。従って、至る所に神聖な言葉、危険な言葉、不幸を齎す言葉があることを私たちは理解します。誓いの言葉が何時までも結び付きます。呪いの言葉が何時までもついて来ます。独白は、人が独り言を言ったり、あなたに言ったりする言葉について極めて真剣に吟味することでもあります。シェークスピアの『オセロ』のイアゴーは、絶対的に全てが演劇です。一言彼に呟いても、全ての自然が変わります。そこには素晴らしい収穫があります。

しかし、私は（出来ることなら）詩の誕生のために、詩を待ちわびることを更に愛しました。ここでも私は、形式が最初であるというのと同じの法則を再び発見しました。しかし今度のこの形式は最初のものとして、言葉に先行することであるようにも私には思われます。何故ならリズムが詩人の前を走り、韻が良く鳴り響く橋のように、上に張り出しているからです。どの様にして行くのかが分かる前に、何処へ行くのかが分かっているのです。この法則は私たちのあらゆる思想に見出されますが、私は若かった時に放って宙に浮いた儘だった思想をここで再び取り上げます。「人は終わりから始まる」。この思想は宙に浮いた儘でしたが、それは具合が良い場所だったのです。ところが詩は、最も平凡であっても空っぽの道の上で言葉を整えることしか出来ませんが、測られて分割されます。この働きは日常の早口で分かり難い言葉を治す薬として打って付けです。しかし、これは大したことはありません。真の詩人はそれを試みて、もっと遙かに美しい秘密を発見します。それは尊重された形式が、ついにあらゆる企てよりも美しい内容を見出すことです。私はそれを、ユゴーに沢山の事例を見出しました。そしてヴァレリーにも同じ位見出しました。ヴァレリーは『若きパルク』において、この最も無謀な方法を極端なまで信頼しております。その方法は人の目に触れませんから、その結果にはびっくりさせられます。しかし結局のところ、その結果は端から端まで美しいのです。

私は以前に、時々マラルメを研究していました。私は白紙の頁を理解しましたが、それは全ての詩の始まりでした。そして信仰と期待から生まれる言葉による不思議な結晶作用も把握しました。同様に、時々イギリス詩の作品を文学的に翻訳する訓練をしても殆ど自然に言葉を嵌め込むまで行きませんでした。それでも何らかの情熱の火を幾つか急いで書き始めました。それは習慣から抜け出て、新しい秩序で強固にされた言葉が、その時に構築されて語られたのではなかったでしょうか。何度も骰子を振るようなこの芸術は、最も奥深く秘められたマラルメの詩の奇妙な形式によって、私に照らされていました。「〈骰子一擲〉は〈偶然〉を決して廃れさせないだろう」。この先見的で非常に雄弁的な詩片が生徒たちの前に提示されて、無言で長く考察されたのは一九二八年から一九三〇年頃でした。私はついに多くを語って仕舞いました。最早、白紙の頁ではなく、詩の二番目とか三番目の状態です。それらは投げ出された形式です。決定的に投げ出された形式なのです。白紙の頁は分割されます。幾つもの白紙が待っています。こうして詩においては全てが偶然です。そうでなければならぬのかもしれませんが。私たちは言葉を巻き戻すようにして、引き出さなければなりません。それに先行する思考に対して、極めて厳格になった詩人は誰もおりませんでした。詩人はそれらの思考を、横目でちらっと見ます。しかしながら、もしもそれを変えないなら、もしも投げ出された言葉の求めに従ってそれを明るく変化させたいなら、彼は決して詩人ではないのです。詩は、散文では決して言えないものを発見する芸術です。それらの観念は、完全な体系になっていたにも拘わらず、『芸術論集』には少しも表しませんでした。私はそれらを造形芸術に適応しました。瞑想の中で実行するのではなくて、実際に創作しながら発見しています。それらの観念は、『芸術論集』から約十年後に刊行した『芸術についての二十講』においてより一層良く配置されて表され、詩が十分に論じられております。

散文のことは何を言いましょうか。私がオーギュスト・コントに発見したのは、勇ましく文体を創って、作家が書いている間に前方を走っていて、既に群を成して規律正しくなっている言葉

についての考察です。それらは散文が、求めていた人を齎す幸運の時に、程良く現れます。そのことから私が見抜いたのは、先行するあらゆる瞑想において、言葉に関する何らかの信仰心と、私たちが言葉を当てに出来ると確信させる吟味が関係していることです。それは言葉への信頼です。言葉に賭けることです。投げられた骰子が刃の上に止まらないのは確かであるように、投げられた言葉も如何なる仕方でも積み重ならず、これらの驚嘆すべき諸分子が表面を揃えて並んでいることは確かです。ここでは共通の習慣が下から働きます。そして自然の儘に何度も言われる言葉が、少しは人間の姿を描き出します。それは私たちの言説を強固にしますし、それと同時に驚嘆すべき創造のための場所を準備します。その先行する観念は、少なくとも詩よりももっと重要な役割を持っています。しかし話をしたり書いたりする技術は、何時も即興という法則に支配されています。それは既にその場所にあるもので、私たちに判断させるだけです。その様にして人は話をします。そして結局のところ、その様にして人は叫んだり、逃げたり、隠れたり、肩を上げたり、微笑したりする昔からの仕草によって意味を表しているのです。何故なら、それらの仕草は他人ためにしか先ずは意味がなく、それらを私たちに送り返す他人の中にしか私たちに對しては存在しないからです。人は表現する術を知る前に表現するに違いありません。そして運命に身を投じることが生きることでもあります。(完)

## 二十二 聴講者たち

私が何よりも豊かであると信じるこれらの無謀な思想は、セヴィニエ校が最後と見做した聴講者のことを考えさせました。それは男女の生徒たち、未知の弟子たち、そして好奇心を持った一般の人々が一緒でした。アンリ四世校の授業の厳格な出席者と比べて何という違いでしょう。何年もしないうちにアンリ四世校では、少しずつ人数も多くなりました。その様にして多人数の規律と、質の高い沈黙が成立していました。私は生徒たちを大人として扱いました。そして、これらの若い男子生徒たちは大人よりも立派でした。恐れず、疲れず、退屈を知りませんでした。私は彼らをピロスの象たちと命名しました。私は自分自身と語るように、彼らと語り合いました。そして彼らは大変用心して、なかなか答えませんでした。私は少しも同情しませんでしたし、彼らも同情を求めませんでした。彼らは誠実さのある、一種の曖昧さを知りました。忍耐強かったのです。私は、彼らの多くが驚くべき飛躍を遂げたのを知りました。しかし結局のところ、彼らは大人に相応しく放任されていました。

私は、セヴィニエ校の女子たちにはもっと面倒を見ていました。彼女らは大人ではありませんでしたし、そのことは良く分かりました。更に、彼女たちは何も知りませんでした。それで授業計画では、助言というよりも命じるものでした。中心に飛び込んで、修辞法によってその中心の周りを諸観念で整列させなければなりませんでした。何故なら彼女たちには時間がありませんでしたし、私も同様に時間がなかったからです。週六時間に対して一時間、これがリセの教育に対するセヴィニエ校の教育時間の比率でした。更に、演習の無い講義を提供するものでした。何故なら、それが少女たちに要求されていたものだったからです。私はこの困難な活動から多くのことを学びました。私は、限りなく前置きを短縮しなければなりませんでした。確かに余りに早く観念を一周するには危険もあります。しかし勇猛な彼女たちはこうしてより身軽になり、力強くなりました。短剣と小さな楯で彼女たちは、静かな審判者たちの集団の中に恐慌を投げ入れました。しかし娘たちは、少年たちのように恐怖を起こさせることは決してありません。審判者たちは、些細な恐怖には恐れません。女性は男性よりも生来から精神的である、との考えを抱いたのはこの時です。私はこの言葉を最も真面目に理解しています。判断することは、第一に人間的形式と本質に関しての機能であるのを私は十分に説明しました。そして女性は人間的形式の擁護者です。そこから雄弁と逆説の無い火のような情熱が、この女子たちに勝利を齎しました。私は人から聞いた噂から、そのことを話しています。何故なら女子たちも、男子たちと同様に口が重かったからです。私は彼女たちが書いたものから認識するしかありませんでした。

私は人間の言葉にも、議論にも、会話にも、大した考えを持っていません。取分け、学生時代には男子も女子も喜劇的要素は無く、演説的分野で成功を収めるのは不可能のように私には思えました。そんな時には、私はその場にはいない方が好きです。そうでなくても私は厄介な立会人でした。書いたものは、もっと直接的です。書いたものは、聴衆を気にすることはありません。その上私は、非難するにしろ褒めるにしろ、常に控え目で慎重でした。そして、非難するよりも褒める方が得意でした。女子たちの間では、最高の称賛が「素晴らしい」という感嘆詞にあったことを私は思い出します。それは言い過ぎではありませんでした。アンリ四世校でもセヴィニエ校

でも、私は何度も天才を手玉に取っていました。私が決して質問せず、告解場のような対話を一種の恐怖を持って避けていたことを知って人々はびっくりするでしょう。これらの条件は常に厳格に守られて、更に大変に良く理解されてもいましたから、私はあらゆる告白から縁を切りました。それらは何時も偽りの告白であり、私は時折三十頁とか四十頁にもなった真に高貴な思索を受け取りました。私は、例え人間嫌いの傾向があったとしても、それは癒されていたでしょう。私が情熱に駆られた不正の愛であると理解していた人間嫌いは、多くが言葉を余りに気にすることになったと私は屢々考えました。そして裁判官のように質問されれば、更にもっと悪くなります。ここでも又、知ろうとする欲望が知ることを妨げます。社会心理学についてこれ以上言うべきことは何も無い、と私は考えています。全ての男女の心を捉えている芝居じみた性格は、既に余りに人を欺きます。しかし自然発生的なものはもっと悪です。私たちを作り上げたいと思うことより、研究することなく私たちにやって来るものの方が私たちににとっての真実であると考え理由は、如何なるものでもありません。即ちその時は、私たちが望むものは少しも私たちではない、と信じなければならなくなるでしょう。そこから人間嫌いがもっと悪い程度のものになります。時々私が我慢出来なくなるのは、詩を創るのに長い時間をかけるので、少しも本心を表さない芸術になっていると主張するのを読んだり聞いたりすることです。私は、まさに全くその反対であると考えます。自己認識に行き着くためには、表現のための長い労苦が同じ様に必要なのです。画家の最初に描いた下手な絵が、傑作よりも良く表現されていると人が言わないのは何故でしょうか。あるいは私が教育した生徒たちは、彼ら自身よりも私に似ていると私は考えるようになるでしょうか。その様なことはなく、決定するのは天才であり、天才は普遍的であると同時に真似が出来ないものです。

セヴィニエ校の女子生徒たちの話に戻ります。私はそんなにも浮いていた訳ではありませんでした。彼女たちは何も知りませんでした。プラトンにもデカルトにもコントにも、初めて接しました。彼女たちは、概要から嫌悪感を持ってそれらの人々に這入って行きませんでした。彼女たちは、パラチナ候女たちとかデカルトを前にしたスウェーデン女王と同じでした。彼女たちをプラトン学派的芸当に慣らすには、少しばかり用心が必要でした。何故なら女性に特有の生真面目さは、少しも到着を急がないオデュッセウス同様に、ドアからドアへ放浪するソクラテスに時々満足しないからです。しかしこの世の者は誰も〈洞窟〉の話や、地獄から戻ったエルの物語に抵抗しません。コントは、少しも抵抗を見出さませんでした。コントは思索家たちの中で、申し分のない女性のことを語った唯一の人であることを、先ず認めなければなりません。そしてコントは女性のことを語り、母性的魅力を物語った唯一の人であることも私は言います。少なくとも次の一行を読んで下さい。「屢々、盲目的になる愛を非難しながら人は、憎しみが非常に多くの盲目を生み、より一層致命的な程度のものになることを忘れてる」。この考察はそれ自体によって、全てのラ・ロシュフーコーのものよりも、私の目にはより一層力があるように見えます。しかしコントはこの探究を、この意味においてもっともっと先まで押し進めました。何故なら彼が示したのは、教育する者たちには重要なことですが、単に母親とか先生の熱心な好意が無ければ、子供は敢えて少しも大人になろうとしなかったばかりでなく、愛情という深い意味を再生して女性の心にしっかりと締め付けられている人間性の形式である愛が、あらゆる決断の推進力と方向性の中心となるのを結論付けもしたからです。この様にしてコントは、少なくとも愛情的性を命

名しながら、多くのことを語りました。別には活動的性という表現から、コントは男性を意味し、生来からも又女性にとって些か危険な伴侶のことも説明しています。コントを説明する時に、この大問題について新説を述べることは難しくありません。

アンリ四世校の女子生徒とセヴィニエ校の女子生徒の間で私が才女と感心した女子生徒たちのことを語ると、違いがあるように思いました。前者のアンリ四世校の女子生徒は、恐らく近くに男子生徒がいることで人見知りして遠慮深いです。ところがその代わりに、後者のセヴィニエ校の女子生徒は、普通に無関心でしかないように装った先生の前では、より一層孤独で自由でした。私は、教育に情を挟むのを決して行ってはいけないことを知っていますし、屢々言いました。それは少なくとも両親を侵害しないということでもあります。この雰囲気は、男子や女子の生徒たち全員にとっても良いことでした。何人かの生徒たちは、才能のあった時代を確かに既に惜しんでいました。私は彼らに良く注意しました、「知性的になるために、あなたの若い時代を利用しなさい。三十歳を過ぎれば、もう馬鹿はいなくなりますよ」と私は彼らに言いました。この注意を人間嫌的に理解するのは間違いです。私の小学校の教諭たちはそうでした。人はこれ以上良いものを見出すと私は考えません。

セヴィニエ校で教えた最後の数年間に旧試験制度が廃止され、男女生徒のために金曜講座が開講されましたが、それは教員資格試験科目のためのものでした。この講座は殆ど人が来ませんでした。何人かの着飾った夫人たちと、私が知っていた何人かの男女の生徒たちでした。この寂しさは、私を予言者にしました。私は黒板を幾つかに分割して、ノートも準備もなしに独りで話しました。私は、空席を前にして少し不機嫌であったと思いますが、通りがかりの彼ら聴講生たちに勇気を見事に演じたと十分に信じています。いずれにせよ私はプラトンやデカルトや、幾つかの抽象的様相を呈する問題について、そこで最高の授業を行いました。楽しくはありませんでしたが、そこで私は多くのことを学びました。それに反して、火曜日の溢れるばかりの聴講生の前では、私は何も学びませんでした。人々の多数性と多様性から軽薄さが巻き上がっていました。私はその時、安易で恐るべき成功を得ようとして、既に知っていたことを単に順序立てていただけでした。それが良かったのか悪かったのか、私は分かりませんでした。年齢による何らかの体の弱さや支障から、私は演説する職業を辞めることにしました。その後、私は書くことで満足しましたし、それで良いと思っています。(完)

後に戻ることにします。何故なら別々になった観念の進行状態を各々に、最近の数年前まで追わなければならないからです。それ故に私は想像力の形式を探求するように導かれましたが、それはデカルトが語るように、魂と肉体による結合を強固にすることでしかありません。芸術は、その作品における形式を、人間が如何に記しているのかを私に示しているのです、その道を私に照らしています。そして人間が思考するのは、まさに作品から出発します。その人間は極めて豊富な一種の図式主義を私に示しましたので、諸観念の自然史のように与えてくれました。そしてプラトンの天使のような諸観念は、何千回以上もその様な人間が地獄へ落ちるのか、救済されるのかを見抜くのに役立ちましたが、全ての人間が有名な神話も下降する図式を形づくったように、絶えずそうなるのです。それにも拘わらず私は歴史を完全に忘れることが出来ませんでした。それは正しく理解するなら、私たちの思想における地理学の一部になるのです。史的唯物論の有名な観念は、私には何時もその一般的表現において、同じ様な意味の語句を反復して強調する方法を行っているように見えました。その適用に関しては、歴史と同じ精神です。それは移住、野営と要塞、取引と探検、職業とその変化に従って、あれやこれやの文明、人間の階級、偏見、情熱、思想、理想と神々が現れるのを見ます。幾何学は、ついには至る所で同一になるにしても、それでも毎年、耕地の境界を見付ける必要があったエジプトのような場所で生まれたのです。天文学は、霧の多い地方では始められません。流体静力学の全てと物理学のかなりの部分は、海から教わりました。同様に建築技術は、固体の均衡法則が我が国の山岳地方に既に自然とあり、麦畑にも建築の要素があります。しかし職業や科学を理解させるだけの、これらの事例に止まっていたは余り良くありません。職業には行為があり、言葉に劣らずそれらの行為には観念を見出しますし、習慣を規定する自然な法則があります。私はバルザックの『田舎の医者』に、死者を悼む二つの泣き方に出会いました。一つは、もう一つよりも厳格で人には慣れないものですが、それは標高の違いによるものでした。私が最も頻繁に、何処から私の観念を理解したかは、この事例からお分かりのことと思います。但し、プラトンやデカルトやカントやヘーゲルの方が、道路坑夫や郵便配達人や牛飼いを私が認識するためには、モンテーニュやバルザックやスタンダーよりも役立ったことを知って貰いたいと思います。しかしそうは言っても時折、行為が観念に先行しなければならなかったことも良くありました。行為から行為への創意工夫は、沈黙した神々しか生まなかつたことを私は単に言うだけです。従って、例えピュロン(1)が疑わなかつたとしても、誰もそれを知らなかつたろうと思います。私は哲学を表象と見做して貰いたくありません。そして、偉大な巨匠たちを決して曲解しない姿勢を私に決心させたものは、表象に止まりたいと思った者たちに表象を失わせていたのです。マルクス主義者たちが事例の後を追いかけて、それらの事例を見もしないでそれらに執着しているのを見るのは、喜劇的です。想像力が理解力になると思うことは、直ぐに行き詰まります。この様に理解すると、宗教史は歴史も宗教も殺します。しかしその反対に、慣習の中で常に観念を探究していると、私は人間を再発見したり、宗教を通じて精神そのものまで見抜くのに希望を持ちました。いずれにしても慣習の観察は、もっと適切に言うなら、慣習的行為の観察は心地よいものでしたし、教育の目覚めであり

、救済された正しい意見のようなものでした。しかしながら私は、人が私の話に大笑いしていたことに気付くのを認めましたし、常に思索の冬から救済される術を知りました。人は楽しみながら教えません。この深く隠された原則は、想像力が理解力に代わることが出来ないと先程私が述べたことの必然の結果でしかありません。これらのことを用心して、私は如何なる新しい風俗、如何なる神学、如何なる政治が、結果として機械織りの発明となって行ったのかを探究するのが好きでした。これを逆に述べるなら、私は亜麻を持ちました。つまり亜麻は機械で織れないのです。一方には工場がありますが、もう一方には家内作業場があります。一方は徒刑囚による様な修行がありますが、もう一方には父や母や兄による修行があります。主の祈りが何処で再び生まれ、そして何処で多分死ぬことになったのか、私は良く理解しました。そして全ての川が亜麻を漬けるのに適している訳ではないのに、私は宗教を流れる川、敬虔で奇跡的な川を持っていました。工場を分散させている鉄道は、都会の精神と田舎の精神を混合させました。犬の調教師と馬の調教師は、二種類の人間を作ります。坑夫は恐ろしい仕事によって規律正しくなります。そして軍務に関しては、卑小さを超えた教義と、孤立した塔のように驚くべき道徳を育むことを人は良く知っています。しかしながら、水兵の信念は陸軍の兵士と同じでないのは明白です。更に、海岸に住む人は、迷信にしろ宗教にしろ政治にしろ、内陸に住む人と対立します。私はその様な諸観念に緩やかな傾斜をつけようとして何時も書いて来ましたが、今でも書いている『プロポ』に導かれて来ましたが。しかし大戦後は千人程の読者のためにしか書きませんでしたので、その変化から私は困難なことにも恐れなくなりました。千人程の忠実な読者は、何時も私について来てくれることを確信していました。それ故に教育は『プロポ』に移り、『プロポ』は教育に移りました。何故なら想像力は観念に道を開き、観念は想像力に生氣と方向性を与えるようなもので、それは同じことであるからです。この光がなければ想像力は、驢馬が自分の耳の影に躓くように、想像力そのものに躓き易いのです。

幸福なアラビアと言われるように、解放されてあちらこちらを散歩するようなこの教育を、幸福な哲学と命名しなければなりません。実際には私は決して遊びに耽ったりしませんでした、少なくとも後悔することなくそれを味わいましたし、弁解して人を笑わせる必要は少しもありませんでした。困難な観念にとってはこれ以上に良い準備は決してありません。〈バルバラとケラレント〉の形式論理学の授業でさえも楽しかったことを私は思い出します。行為には継続した図式主義を運用することである、と私は思います。人間の身体を解放するのは並々ならぬことであるからです。

読者が有頂天になることなく上機嫌で、小品で構成された作品である『思想と年齢』によって解放されたことを私は願っています。短命でしたが美しい雑誌「銀の船」には、『思想と年齢』に所収されても良かった小品が幾つも見付かることと思います。それらが何故一つも所収されなかったのか、私は言う術を知りません。それは『マルス』の新しい方法だったのですが、興奮は何らありません。私は人間と和解したのです。長所の中のように短所の中でも、その詩人を愛しました。如何にして幸福と不幸が詩の中で変わるのか、そして神話と芸術と宗教が毎日身につける衣服を作っているのかを私は理解し始めていました。この明るい気分がこの本の色調になっていて、少なくとも外見上は平易過ぎること以外に私は非難しません。それには私にとって〈帰還〉の味わいがあります。私は無頓着をそこに見出します。赤い雑誌から私がこれ程入念

にさせられたことはありませんでしたし、その上私は愛しました。私を理解してくれた労組員としか私は知り合いになりませんでした。勿論、彼も同様に本心を求めていました。

同じ頃に私は数日間で短い作品を書きましたが、それは大変に早く発表されました。それは殆ど評価されていません。何故なら五十部しか印刷されなかったからです。それは〈友情〉の証しでした。偶然から私は見知らぬ読者の一人、多分最も迅速で最も鋭い人々のうちの一人と会いました。私は彼のために『心と精神の問題についてのアンリ・モンドール博士への手紙』を書きました。この書物は私が特別に愛した一つの事例で、今でも豪華本を数冊持っています。それは、全ての困難が集められている問題に取り組む直接的な方法の本でもあります。私の生徒たちが良く知っている方法です。感情の情動と情操に関する自説が常にありましたし、今日でも私のディオゲネス(2)の樽になっています。私はそれを私の前で揺らすだけで、殆ど前進していません。  
(完)

- (1) ピュロン(前三六五頃～前二七五頃)は、古代ギリシアの哲学者で、懐疑論の祖とされる。 (2)  
(2) デイオゲネス(前四一三～前三二七)は古代ギリシアの哲学者で、犬儒(キニク)学派の代表者。辛辣な精神を持った彼は名誉も富も社会的礼儀も軽蔑し、素足で一枚のマントを覆って、樽の中で生活したと言われている。

多分お分かりのことと思いますが、この様な曲がりくねった足取りで私はヘーゲルに近付きました。それには本屋での偶然の出会いがありました。私は、ベナール訳の四巻か五巻の『美学』を発見しました。そして、その問題についての講座を上手く何回も再現したものでした。私は新しい国に入ったのです。そして誰も必然性を持ってヘーゲルのことを私に話していなかったことを、直ぐに理解しました。私は嫌悪と大変に奇妙な軽蔑を何度も感じました。恐らく同様にハイネもそれを良く理解していて、この巨大な教授は思索の如何なる試みも、その後大変に難解なものにしたのです。そして実際に、それは最近の哲学で未来に手を付けた唯一の哲学です。この重苦しくて生真面目な人は、ドイツ人がフランス人を気に入らないのと同じ理由で、気に入られなかったのでしょうか。私たちフランス人が軽薄で、虚栄心が強いのは本当でしょうか。私は、今まで見て来たとおりの、職業とか大河を良く見詰めるばかりで、何も分かりません。この方法では祖国を把握することが出来ません。

私はヘルとはその当時まで学生並みの口論しかしませんでした。彼はヘーゲル主義者の中で最も博識ある人と見做されていました。戦争になってから彼はより穏やかになりました。彼は全面的に『精神と情熱に関する八十一章』を受け入れてくれました。『芸術論集』も全面的に称賛してくれました。『思想と年齢』にも進んで興味を示してくれました。しかし、彼はそれらの本を少しも読んでくれませんでした。当時から私は、今でも大理石の人物像がある有名な役所の近くで、屢々人と会いました。私が変わることなく急進的であることに、彼は尊敬の念を抱いているのを決して隠しませんでした。彼は余りに多くの背教者たちと知り合いでしたが、決して一人も許しませんでした。遅まきながらも全く篤い友情があったために、思い切って計画していたヘーゲルについての授業に関して、私は彼に助言を求めました。それは大戦後に平和になってから数年後のことでした。私は驚きましたが、思い切って授業を行うことを彼は激励してくれました。ヘーゲルが何時も再認識されるために十分強固に構成されていたことを、恐らく彼は深い研究によって知っていたのです。そして更に、ヘーゲル程に裏切られ、あらゆる意味において撃たれて引き裂かれた作者は、誰もいないことも彼は知っていたのです。彼は、私がフランスにおいてヘーゲルを復権させるだろうと判断しましたが、少しも間違っていないでした。彼は、私がヘーゲルの『エンチクロペディ（百科全書）』のドイツ語原文を持っていさえすれば、フランス語訳で十分であり、実際にその骨組みは堅固であり、あらゆる重大な問題から守ってくれるに違いないと断言してくれました。

私が知る限り、誰もヘーゲルに関して言わねばならないことを、その体系は別として何も言いませんでした。それはすなわち『精神哲学』でも『美学』でも『宗教哲学』でも何でも良いから読んでみることで十分なのです。人は直ぐについて行くことが出来る貴重な観念を見出して、やがて光明を得るようになるのを知ります。幾つかの例があります。あなたが、主人と奴隷の対立に偶然出会います。そして、もしもあなたが単に十行読めば、歴史の鍵を一つ手に入れる予感がするでしょう。何故なら、それらの不規則な中における状況は、他のあらゆる意味合いも一つの中での不規則にするからです。一方だけでは何も教えず、何も理解しない位置づけにさせられま

すし、全てを忘れることになります。やむを得ず他方が、知識と判断と美徳を貯えます。次の決まり文句を読めば十分です。「奴隷は主人の主人になり、主人は奴隷の奴隷になる」。平俗な沢山の事例を参照するものであり、不規則な世界は又、絶えず大変化を起こす結果となります。お金持ちが貧乏人になり、貧乏人がお金持ちになることも確かにあることです。しかし、観念の中心を掘り下げて下さい。さもなければ、経験はあなたを例外から例外へ向かわせることでしょう。あるいはあなたは、誰もが興味を持つ表題である『戦闘』を読み、直ぐにでも最良のものを発見します。すなわち、思考する人間（自己）は、他に思考する人間を発見出来ても、彼だけの帝国を脅かす野望には忽ち憤慨せざるを得ません。そこから挑戦と閉鎖的戦場が生まれます。暴力的衝動無しに議論出来ない者たちも、この攻撃には報いなければならないと理解するに違いなく、そのことが極端なまでの暴力を導くこととなります。人には、この賭けが正々堂々といかさま無しに行われることを要求する権利があります。人間はここで正体が暴露されます。この他の自己による自己の再認が体系の一契機であり、ヘーゲル弁証法の適用であっても、差し当たり私には重要ではありません。何故なら、観念はそれ自体が宝ではないからです。観念は方法であり、道具です。私は何も誓いません。私は一つの鍵を試してみます。そうして又、別の鍵も試してみます。このことは、如何なる観念でも構わずに形づくれることを決して意味しません。私は既にそのことを説明しました。私は先ず、体系をばらばらにします。それが意味するのは、機会があれば自己で理解するように試すことです。もしも私が美学講義において、ジュピターが〈泥と血の神々〉に勝ったことを発見したなら、既にその観念は、当初から通路が決して見えない諸宗教の広がりの中を探究する一つの方法なのです。そして、〈魔法〉即ち直接的宗教について私は既に、〈魔法使い〉が自分自身の体を動かすように、全ての事物を動かそうとしている人間であることに気がきます。確かにこの見事な外見を持っている定義に従うことは、社会学者の事例の中で道に迷っているよりも増しであると認めましょう。尤も、事例はヘーゲルにもあります。私は少し強調して言います。何故なら、殆ど避けられない間違いとは寧ろ間違った運用であり、取りあえず〈論理学〉を消化したいと望むことであるからです。それは抽象的形而上学の批判でしかなく、あるいはお望みなら超越性の批判でしかありません。しかし、それにしても有名な定立、反定立、総合の三項の働きは、少し研究してみたならば、それ自体によって反響が一杯あります。そして、それらの矛盾を仕方のないものとして受け入れなかった者は、決して前進することが出来ません。無敵の懐疑論者であるピュロンが現れるのを見るや否や、人は避けて通らなければならず、討論する代わりに判断を下さなければならないと強く感じます。ヘーゲルのこの論理学には既知の全論理が見出され、〈先験的論理学〉がその時、旧論理学に続く方法を整理しているのを人は見出します。従ってそのことは一読して古代の学問から近代までを導く、その様な弁証法的運動を真剣に考察させるようになるでしょう。人は全くの無知でない限り、古代人の間違いは無益でなかったこと、あらゆる方法でそこを通らなければならず方法的に彼らと共に誤らなければならないことを強く感じているのです。ヘーゲルの〈論理学〉には、乗り越え難い困難は少しも無いと私は告げたいと思います。

しかし、私はもっと適切に言います。二、三節の文章に躓く時、次々に好奇心が強くなるためには、全体の進行が十分に明らかになってくると思います。そして、この進行は私たちを抽象から自然へ導きます。それは例外なく私たちの全ての思考の運動です。それは〈論理学〉が単に否

定されることではありません。ヘーゲルの表現に倣うなら、それは否定されると同時に保存されることです。取りあえず私が理解出来ることは、〈論理学〉は唯一の真実ではなく、寧ろ真実への一本の道であり、それは良識のものであると私は思っていました。

〈自然哲学〉が当然に読者を恐れさせているのを私は認めます。そして、私自身を安心させられるように熱意のある読者にはもう安心して欲しい、と私は思っています。〈論理学〉は、それだけでは空虚な諸形式に導くだけであり、〈自然〉の中に身を投げなければなりません、しかしながら私たちにとっての精神である、推敲された抽象に基づいて読もうとしなければなりません。それは自然の中に、精神の痕跡を再び発見するために戻ることです。人は嘗てその他に何をしたのでしょうか。単にその時、アリストテレスは星々が神々であり、神々に相応しい唯一の曲線である円を辿ると判断しただけですが、ヘーゲルは諸存在の本質に、より一層近いものを多く把握していました。それは最初に見たところは無機的と有機的の二つの種類に分類されるものです。けれども有機的世界は全てが鏡のように、精神が自らを認識した瞬間に壊されて見失うのは本当です。動物たちが思考するという観念は、取るか捨てるかの一つの観念です。それを捨てる者たちは、逆説的に非難されます。その時は、その観念を取るべきでしょうか。私たちはそこから一種の詩とか神話に身を投げ入れますが、それは常に狂った命題とは限りません。私は無機ものを捨てます。内在的精神に従ったその解釈は、例えば水晶が生命のあるものから生命の兆候の無いものへの何らかの通路で、恐らく全てのものの生命の粒がある人間たちを何時も明示していたとしても、危険でしかないのは明白です。ライプニッツは人を恐れません。私たちの後に捨てられるべき〈論理学〉自体の如く、人は大変明白に運命づけられた〈自然哲学〉を少しも恐れてなりません。捨てて再び取るのです。このことに何の不思議があるのでしょうか。私たちは全く自然に人間に戻ります。自然でもあり、動物の中で最も思考するものです。しかし人間が動物であり、自然であることを忘れないようにしましょう。今は一種の冒険的弁証法に従ってどうかこうにか秩序立てられた自然の状態から出発して、『精神哲学』の表題に基づいて、自然の人間を思考することが問題になります。それより仕方がありません。すなわちその時に思考する〈自己〉及び思考の諸様式の研究に戻らなければなりませんし、それは〈論理学〉を再び始めることになります。要するにヘーゲルは、極めて明白に動物的で宇宙的な人間の歴史に、今度は〈精神〉を探究することを私たちに勧めているのです。そんな訳で『精神哲学』は、〈論理学〉を再び始めないのです。（完）

この通路をもっと良く解明するために、それは難しくなると言いたいのですが、私はアムラン(1)の体系を再び取り上げます。アムランの体系は、範疇の順序が異なっていますが、ヘーゲルの体系に一見して似ています。しかもその相違は、この二人の作者において抽象から具象へのその順序に気付くことに変わりなく、空虚な一連の形式から出発して、人間と世界を獲得しに行きます。そして、その歩みは孤独であり真実であると私は確信しております。何故なら経験において、それらの純粹形式は決して見出されないからです。純粹形式が無ければ、経験は精神を粉々にするからです。それ故に二人とも、正しい一歩から出発したと私は思っています。そしてアムランでさえも、同一の関係から出発することを主張しながら、反対と呼ばれる任意の項に従って当初の厳格さに何かをつけ加えました。私は、アムランが矛盾の代わりに反対を用いる処に、ヘーゲルからアムランへの進歩も見出しますが、それは反論の群を追い払うものです。というのも私は、ヘーゲルが矛盾を思考した瞬間からそれを捨てなければならなかったし、矛盾を思考することは不条理そのものであるのを必要とした、という話を聞きましたし読みもしたからです。ところがアムランは、一と多、静止と運動、存在と非存在のような対立は、厳密には決して矛盾ではなく、寧ろ相関関係のものと大変良く理解していたのです。厳密に言って矛盾は、行動の問題にまで送り返されるようになるのです。肯定と否定を選択しなければなりません(例えば、お金を返すとか返さないことです)。そして理論的に解けないことで体系は終わり、世界が始まります。私はここを要約して言いましたが、何卒お許し頂きたい。私はアムランを直接論じません。アムランは少しも私の思想に入って来なかったからです。これからその理由を述べたいと思います。

アムランの演繹は、その関係から数、時間、空間、因果性、目的性を通して自由な意識、つまりあるが儘の人間へ彼を導きます。ところが人間が産まれたのはその様なものではありません。この二重の歴史において人が見抜き再び発見するのは、夢、物語、伝説、狂気、戦闘、つまりそこで人が創り出し得る限りの泥と血です。ここでのヘーゲルはより一層大胆で、その問題には最善で取り組みます。彼の〈論理学〉は、彼を世界へ導きます。しかし、存在としての弁証法が彼を純粹な関係に導き、ついに精神は空虚な形式の中で迷います。その結果、全ての真実が誤りそのものになりかねなくなるのです。この対立の解決は、彼が〈理念〉と呼んでいる実際の観念にあります。例えば、鱈における鱈の観念は、現実の観念です。同様に、ソクラテスにおけるソクラテスの観念も同じです。その様なものが、世界における飛躍という弁証法的契機です。鱗に包まれて不可解で観念が予感されることさえあるので、計り知れない極限の世界へ行かなければなりません。今後は内在性が思想の法則です。最早、存在と観念を分離することは許されません。例えば、ローマ民族の観念は、私が自ら創る観念ではありません。そうです、それは彼らの活動、風習、政体、ローマ法の概念、そしてそれらと類似するものによって、ついにその日に生まれたまさにその観念です。そしてヘーゲルにおける重要な点は、事物と面と向かってしかその様な

実際の観念を見抜けないということです。かくしてローマ人は、国家が小アジアとかゴール地方のことを考えているのを、前もって言うことは出来ませんでした。そうなのです。しかし、軍団は前進しましたし、交渉人が後に続き、ローマの平和が設立されました。ローマ法は習慣と折り合いました。そして、ソクラテスでさえも彼の現実の独自の生涯にあって、戦いや抵抗の計画や対話でさえも、計画を作ることが出来ませんでした。まして彼の死を計画することなど出来ませんでした。しかしまさにその瞬間にソクラテスは更に、ソクラテスになるための新しい方法を創り出したのです。もっと適切に言うなら、本当のソクラテスに発展させた方法です。今、もしもローマの歴史とか、ソクラテスの歴史とか、宗教の歴史を振り返って見詰めたなら、全く明白な精神が見出されるでしょう。ソクラテスやカエサルやイエスに課せられている問題は、精神の問題でした。それは、出来事という圧力によって人が最早考えることが出来なくなったこと、それらの思考がそれらの間でお互いに戦い出したこと、この矛盾を乗り越えなければならなくなったことが発見される地点に至ったのです。そして現実の弁証法で最早抽象の弁証法でなかったこの活動は、民族の、人間の、歴史そのものの生活でした。というのも出来事に屈するしかない者は、死ぬことであるからです。民族は制度、警察、法律、監獄を作りながら生活しています。そして何時もこの生きた歴史に乗り越えられた対立、つまり精神的で若々しい言葉を再び見出します。それこそが伝統の本質です。ローマの軍隊は、新しくて常に古いから軍隊なのです。そして現実の民法を生むことは、権利と公平の間で避けられない矛盾を、出来るだけ一人ひとりが乗り越える（行政官に聞いて下さい）実際の判決を記録して生むしかない判例を提示するように、保存しながら変えることなのです。例えば、取得の問題において（私が借地人になって農地に納屋を建てるとします）、他人を犠牲にして裕福になることが出来ないのも明白です。ところが所有権という権利は使い果たすことにあり、濫用することにあります。これらの判決は本当の判決であり、唯一の判決ですが、その総体からついに誰のものでもない新しい思想が生まれます。同様に、実際の政体は誰のものでもありません。ここでイギリスの政体と我が国の政体を考えて下さい。君主制と民主制が形づくられる概念を比べて下さい。それらは〈論理学〉の一部分でしかありません。権力と権利、命令と自由、資本と労働という対立は、論理で解くことが出来ません。寧ろ、この種の解決は空想的と言われますし、当然のことです。というのも何処にも存在しないからです。しかしながら、王たちや裁判官たちや世論は絶えずその様な矛盾を克服しており、更に他の矛盾も生まれるようになります。それが生きて働きかける思想です。

ソクラテスが彼自身の不可能事（法に従うことと法に抵抗すること）を、彼自身としては如何に解決したかを完全に理解するのは、更に難しいことです。表面だけでも洞察してみましょう。真の思想を見出したので毒人参を飲むのである、と人は言おうとするでしょう。しかし、そうではないのです。そこでのソクラテスは生きていなかったのです。生きているソクラテスなら、盃を手にとって神々に献酒を捧げていたでしょう。少なくともこれが彼の意志です。というのも死刑執行人は、きっちりと一人の人間を殺す毒人参を粉に挽くだけであつたからです。そうしてソクラテスは飲みました。このことはその後の不屈の思想を、その場にいなかったプラトンに投げ

込んだのです。かくしてソクラテスの思想は、全歴史を貫きました。只一度そして永遠にソクラテスは死にました。デキウス(2)も死にました。イエスも死にました。「死と共に〈精神〉の生活が始まる」とヘーゲルは言いました。私は、この偉大な体系に固有の反響を聞いて貰うために、この難解な言葉を敢えて引用します。私がここで述べる解釈に少しでも疑いがあるなら、『精神哲学』の中の「法律」又は「民族精神」の項を探してみなければなりません。私は、あるが儘のヘーゲルに賛成するか反対するかを、自分で鍛えて欲しいと思います。マルクス主義者たちには、この規律が絶えず欠けています。恐らく、マルクス自身にも欠けていたようです。アリストテレスはプラトンに対して不当でした。スピノザはデカルトに対して、マルクスはヘーゲルに対して各々不当でした。感嘆が怒りに変わるのは、一種の法則です。私は、情動の弁証法、つまり聴覚障害者や視覚障害者の弁証法があることに気付いています。

如何なる処で聴覚障害者や視覚障害者になるのでしょうか。鱈や狼の思考は見抜けられないし、人間の思考も又完全には見抜けられないということです。機械的存在に考慮を払わなければなりません。それは絶えずそれらの存在を砕き、変形し、それらとは別の謎を課して、道は塞がれています。外界の危険を前にして、人間は如何に難局を切り抜けるのか、それが全歴史になります。こうした訳でヘーゲルは観念論者であると言えます（「全ての理性的なものは現実である。全ての現実的なものは理性的である」）。その様に言っても、大変に間違った言い方です。観念論がその体系の中に位置を占めます。しかし、観念論は古い昔の時間です。もっと正確に言うなら、世界は全ての理性的なものを前提にしています（それは一人ひとりが行うことです）。しかし、決してその様に認識されておりません。そして歴史を動かす理性とか観念が常に示しているのは大地であり、大地や肉体や最も貧しい人々の欲求から引き出されたものであり、それらが何時も一番力強いのです。ですからマルクスから史的唯物論、換言するなら唯物弁証法の主要な観念を多く引き出しました。問題ではないのでしょうか。精神とは大泥棒です。

私はそれ故に、マルクスが自分で思っている以上に、その弁証法によってヘーゲル主義者であると判断します。しかし実際の思想の風潮を考えると、現代全体がヘーゲルから受ける衝撃は、マルクスが受けたヘーゲル的観念が世界の中で改めて高められて放されており、それは永続的変化という観念です。この観念は神秘的です。でも、それが正確に描かない理由になりません。神秘的であることは、明晰でないと言いたくありません。この観念をもっと正確に把握するには、論理から自然への飛躍を行った瞬間から、大きな秘密である内在性を取り戻しましょう。精神は普遍的で、〈論理学〉もそのことを示しています。全ての論理学がそのことを示しています。そしてそれを否定したいなら、人は全ての形式を拒否しますし、自分の精神も拒否します。少なくともこの形而上学はそれ自身で孤立していて、少しも運動のことを説明していません。反対に、精神や芸術や宗教の哲学は、普遍的精神が世界の中で働くためにあり、全ての存在や全ての人々や全ての民族の中で探求し、発見し、止揚することを表します。世界とは、神の夢のようなものですから、決して精神を説明するようにならないのは様々な理由から明白です。何時も死は、口が全てを言う前に口を閉ざして仕舞います。何時も瞬間ごとの小さな死は、観念を閉じ

込め、固くして、使い切り、殺します。或いは別な言い方をするなら、精神は観念の倉庫ではありません。真の精神は、真理の合計ではありません。真の精神は、誕生と再生のための精神です。救済のために破壊する精神です。活動力、この言葉こそがヘーゲルの情熱を説明するのに相応しいものです。確かに再生するために死ぬ情熱が、ヘーゲルの中にあります。誰もそれを否定しません。神を模倣することは全てを止揚することであり、全てをもう一度止揚することです。出来ることなら神も止揚することです。

私には観念が良く見えます。いや寧ろ、私は出来る限りそれを私の中で実践的なものにします。このことには立ち入りません。もしも私が嘗て何か役に立つものを書いたとしたなら、〈静的なもの〉を書いたのであり、〈動的なもの〉ではありません。ですから自分のやり方で、私の立場から安定性と保存の諸要素を表すことが、根本的には真実なのです。私は歴史も進歩も殆ど信じません。私は寧ろ、人間という変わらない構造によって、名前は違っていても全ては同じものに帰することに気付いています。地球がゆっくりと冷えることがそれを許す限り、同じことです。この点でも又、私はヘーゲル主義者です。何故なら、人が何時も克服するために同じ硬化が行われることは、克服すべきではないと言いたくないからです。少なくとも私は、変化のための変化という神秘主義に憑かれていません。屢々言うように私は、牛の如く歩いて、私たちを表面的には同一の轍に置き直す無感覚で感じない革命を愛しています。例えば、小さな所有権は再びその所有権を助けます。私が見るところ、そこには人間の活動がありますし、ゆっくりとした精神の変化があると言いたいのです。私はここでどうにかこうにか納得します。哲学のあれらの極端な立場は、人が信じるだけの重要性はありません。絶対的精神のことも、私は自分の思想以外に何も考えません。（完）

（1）オクターヴ・アムラン（一八五六～一九〇七）は、ヘーゲル哲学をフランスに導入した哲学者。

（2）デキウス（二〇一～二五一）は、伝統宗教によりローマ帝国再建を目指し、キリスト教徒を迫害したローマ皇帝（在位二四八～二五一）。

## 二十六 再びヘーゲル

さて、私は一九二〇年から一九三〇年までに、ヘーゲルについての講義を三回行いましたが、それは一年間で毎週土曜日に行いましたので、大変詳しいものでした。初回は、勇気を忘れずにこの巨大な哲学の目次をやっと迎えるだけでした。しかしその後は、もっと上手くやれました。そうしている間に、生徒数も年々増加して行きました。ヘーゲルについての三回目の講義は、大きな机が幾つもあって、中央には大きな通路がある図学の大教室で行われたことを私は大変良く覚えています。正規の生徒が七十五人程いて、更に何人もの高等師範学校の学生がいましたが、その中に愛好家も数人が紛れ込んでいました。この神託を聴きに来るために、イギリス風に土曜日の午後を休みにしている若い銀行員もおりました。私は、これらのことを後になって初めて知りました。この種の聴衆を注視することはありませんでしたが、私も彼らと大変に近い所におりました。音響効果が悪くて声が届かなかったのです。私は中央の通路を行ったり来たりしました。最も難解な文章の中から予め選んで置いた頁を読ませて、私は注釈しましたが、何もかも明らかにすることはしませんでした。でも、少なくともそれらを根本からひっくり返して、私自身の思想と響き合う何かを何時も求めるようにしていました。私自身の思想とは必然的に余りに難解であり、最も大胆なヘーゲルでさえもそれに比べれば明解でさえあることに注意して下さい。若者はそこに、自分が求めていたものを明白に見出しました。つまり一種の詩の精神です。それは殆どカントの講義とは正反対でした。しかし私は、この様な外見上の矛盾を気にしませんでした。私は決して反論しないで、著者を重要な人間的事実と見做すという私の規則に従いました。実際に私は、ウェルギリウスとかホメロスよりも、プラトンとかヘーゲルが何故反論されるのか理由が分かりません。私はソルボンヌ的方法から遙かに遠く離れた処にいました。

このことは良く理解されていませんでした。対策上の電話が何本かかかって来ました。「校長先生ですか。アランの授業を聴きに行ったと思われる学生が少なくとも三人抜け出しました。その辺を調べてお返事を頂けないでしょうか」と高等師範学校から言われました。校長は学監に伝えましたが、学監は少しも気に留めませんでした。こんな状況が少なくとも一年間続きました。管理当局は結局のところ、真面目に対応するようになったのだと思わなければなりません。この流行（当局はその様に言っていました）は過ぎ去りました。読者は、恐らくこの様なことには殆ど関心が無かったことと思います。いずれにせよ、私は望むにしろ望まないにしろ、知らぬが仏を演じていました。ニコラ・ボワローの叙事詩『譜面台』を思わせるこの小競り合いの終わりに当たって、教育活動を終えるまで思考する先生方の中で最も重要な方々まで襲ったこの騒ぎの喜劇的な証拠を、私は他にも何回か握りました。私は新作の『譜面台』を書くつもりはありません。大物を気取る滑稽さだけは断じて避けたつもりです。兎に角それらの状況が、競争のゲームに入ることを思いとどまらせたのは事実です。この問題を考えると私には、中等教育の最高の地位が何と言っても似合っております。恐らく高等教育の仕事も多分申し分なく熟せたと思いますが、私は決して行おうとしませんでした。

そこから理解していることを私はこれから説明しなければなりません、それは単に文献批判とか解釈点検のように形式の様々な相違によるのではなく、もっと深い相違によるものです。高等教育は私たちの思考の成熟期に対応します。小麦を取り入れて、吹き分けるようなものです。他方、私たちは種を蒔きます。私の生徒たちはまさしく詩と思考が分離されない年齢になったのであり、そこで共鳴する不可思議に全ての自分の心を適応させます。マラルメの「骰子一擲」のことは前に書きましたが、それは私たちの極限の謎の一つです。ラニヨーは、彼の〈曖昧さによる明晰さ〉で私を尊敬させていました。従ってある意味で私は、明晰であることに軽蔑していました。私は、ラニヨーの若い友人で弟子でもあった人と、何年か振りで再会した時に「曖昧でなければならないなどと思ってはならない」と私に言ったのを思い出します。私が動揺して答えたのだとまさに人は思うでしょう。しかし結局のところ、私は何を答えるべきだったのでしょうか。

ヘーゲルは私の手本として役に立ちます。ヘーゲルが私たちに教えていること、つまり神は絶対的な精神であること、神は内在的であること、神は生きる者であり、世界にその存在を示していること、そして神が思考に応じて（神は際限なく自らを思考しています）精神的出来事は展開されることを私は信じるのでしょうか。私は、私のアリストテレスを認めました。この一致は、私がアリストテレスを間違っ理解しなかったことを証明していました。しかし結局のところ、私が純粹現実態にまで自分を高めて、有名な〈思考による思考〉を解明した時、何を望んでいたのでしょうか。同様にヘーゲルに、全生命、全思想、全歴史の調整者である〈完全なる生者〉を再び見出した時、私は神の夢に取り憑かれたと感じたのでしょうか。確かにそうです。しかし、それは少なくとも方法としてであり、カントよりもホメロスの観念を私は何時もより良く探すが好きだったのと同じやり方なのです。カントは学校の先生であり、彼に祝福あれ。カントの砂漠に祝福あれ。そこでは精神の誠実さが学ばれ、そして何度も繰り返し学ばなければなりません。しかしながら私たちは母なる〈自然〉に駆けつけて、その暖かな襁の中に隠れる奇妙な有袋類です。私たちが眠るのはそこであり、目覚めるのもそこです。ヘーゲルの真実は、私が理解した処、人間の世界が相当の迷信も最早存在しない歴史の段階に到達したことはありませんでした。それどころか私たちの思考の最初の状態においては、私は迷信しか見ませんでした。コントはその点について私に教えてくれました。コントは私たちのヘーゲルです。コントはヘーゲルのことを良く知らずに言いました、「ヘーゲルは彼の精神で何を言いたいのだろうか」。芸術、神々、様々な哲学を通しての進歩は、意識による各々の試みにおいて繰り返し行われるものです。それを通して、あるいは下から上へ再び高くなることによって私たちの実際の思考は、学んだ思考から区別されるのであると私は理解しました。私が精神に目覚める方法として、曖昧さを理解出来たのはこの様な見方によるものです。そして今でも私自身にとっては、曖昧な点に先ずは多く止まります。言うなればそれは曖昧さの全ての側面を探究する盲目的変形の方法によって、それを確認するのと同じです。人は余りに早く説明しますが、その時人は全ての結果よりも限りなく貴重な何かを失います。それは飛躍を失い、信仰を失います。何故なら、私たちを感動させ

る血縁のように親しいある種の曖昧さは、絶対的に私たちが美と呼んでいるものによって誓うことが出来る思想を約束しているからです。それに反して時期尚早の明晰さは、その時私たちが自分自身と共に少しも思考していないという感情によって、殆ど茫然自失するようになるからです。そして、この感情から何度も私は性急に話すようになり、殊の外草臥れました。しかし私は、如何にこの惨めな知性から私を救い出すかを直ぐに知りました。そして私の若い友人たちも時々そこから救い出したと私は思っています。この方法は屢々気分に従うものです。その方法は、修辞学の訓練が生徒たちに自分を全て説明する方法を与えるや否や、時々（あなたが思っている以上に屢々）意味深く受け取られる作文に躍動します。それは、説明することなく繰り返されるのを好む魔術的方法です。それが何故いけないのでしょうか。魔術も人間的なものです。詩も人間的なものです。シェリングを少しでも読んだ者なら、ここでは趣味が証明の代用になるのを認めることでしょう。それはこの卓越した魔術師の身上をなすものでした。しかしハイネが『ドイツ論』の中で言っているように、大変に良く秩序立って一貫して力強いヘーゲルを理解した時、人はシェリングを捨てました。そして哲学史は私たちの思想の歴史に似ているので、フィヒテからシェリングへ移ったように、シェリングからヘーゲルへ常に移らなければならないと私は言います。フィヒテからシェリングへの移行は、あるべきものの〈論理学〉から自然への移行です。そして、それは私が言ったようにヘーゲルの中にあります。シェリングからヘーゲルへの移行もヘーゲルの中にあります。自然の中で泳ぎ、敢えて言うならアザラシや鯨のようになってから、精神に戻らなければなりません。それも一回ではなく、千回であると私は言います。一分間で千回もやれば恐らく私たちは論理を捨て、海水に沈め、再び浮かび上がります。結局のところヘーゲルは正しいのです。私たちの全思想は下から生成します。それは生来の夜の中に沈み、そして再び沈みます。この運動の中で若返らない者は、非常に早く歳を取ります。その老人は懐疑論者なのです。私は、彼が偽りの雲を集めるのを非難します。雲は余りに沢山あるのです。

ヘーゲルの深みについてはこれで十分です。もう一度言いますが、それは通路でしかありません。しかし私は、ヘーゲルが芸術や宗教に関して教えてくれる中で、更に学ぶべきものを見出しました。そこでは殆ど何時も〈精神哲学〉の洞窟に戻ることなく、驚嘆すべき区分と自分を示しながら証明する秩序によって聴衆を獲得します。全ての人間の歴史は、これらの巨大なフレスコ画に現れています。

しかしながら私は、ヘーゲルが芸術に関して言ったことに驚きましたし、殆ど怒りを覚える程でしたが、それは彼によれば、芸術は今では殆ど全てが過去のものであったということです。それ故に私たちは（私たちとは、つまり現代の大衆です）、宗教によって哲学へ達していたのであると私は思いました。悲しいかな、それに応えたのは新聞であり、古代から蘇った専制君主たちでした。芸術も又応えましたが、上品でした。いいえ、違います。私たちは進歩という確かな一点にいませんでした。何時かそこにいるということもありませんでした。何故なら芸術によって始まり、宗教に至り、哲学によって宗教を乗り越えなければならないのは単なる〈人間性〉ではないからです。この見事な走りをやり直さなければならないのは全ての人間であり、一人ひとり

の思想の中でやり直さなければなりません。ここに至り、私は最早ヘーゲル主義者でなくなりました。しかし、私にはどうでも良いのです。彼自身は対立によってもう一度、彼の反対に私を投げ入れましたが、反対者の力に溢れていました。従って私は全く別な風に、諸宗教の秩序とその後の経過が見えていました。何故なら、もしも芸術と宗教には真実の力強いイメージがあったなら、何時もそこに降下し、何時もそこから逃げ出さなければならぬからです。『神々』は、多くをヘーゲルに負っています。しかし、そこからは又別の思想も私に方向を示さなければなりませんでした。

私はより一層迅速に、私が正しい政治と信じるものに連れ戻されました。地位に就くことや築くことから私たちを思い止まらせるヘーゲルの政治があります。私たちは殆どそれを断つことが出来ません。停止するものは何もありません。昨日の正義は、明日の不正になります。それらの矛盾を見なければなりませんし、それらを乗り越えて解決しなければなりません。大変によろしいことです。しかし、もしも歴史そのものに歴史を折りたたみながら、私が神話的人物のこの無限の進歩を、一人ひとりの中で再開される無限の進歩と解釈したなら、私は生成される歴史を少し別な風に読むでしょう。政治が、君主制擁護的又は民主的であるか、宗教的又は無神論的であるか、資本主義的又は共産主義的であるかに拘わらず、政治の明白に明らかな部分は急速に死滅する運命にあることが私には見えます。従って、大地に、下部の必然性に、その時その時の経験に戻り、そこでイデオロギー上の大きな道具を鍛え直さなければなりません。そしてレーニンやトロツキーは、絶えず彼らの政治を救いながらも悪い出来ではなかったと私は思います。そしてスターリンにしても、人が知る限りにおいて、幾つもの困難を非常に驚くべき調整を行った農地政策によってお分かりの様に、うまく継続していると私は思います。いわばその時、彼らのソルボンヌの怒りとか破門もお分かりになることでしょう。何故なら、彼らにもソルボンヌの一つ位はあるからです。しかし自由を守るのに一生懸命の市民である私は、これらの偉大な事例から何を引き出せるのでしょうか。大凡は次のとおりです。自由は、戦争によるにしろ、商工業の危機によるにしろ、内乱によるにしろ、危なくなっているのもっと良い時代まで自由を延期することなどは決して問題になりません（もっと良い時代などありません）。塹壕の中でさえも、それらの自由を救い出さなければなりません。私は、障害に最も近い所でも仕事にぴったりと合った手段によって理解します。例えば大臣たちは、労働組合員たちが我慢出来なくなることをだんだんと決定しています。本当の政策とは、労働組合員たちに道を開けて、名誉も与えることです。その時は彼ら自身も限界を悟るでしょう。ここで私は止めます。しかしながら私はもう一度読者に、『精神哲学』の「客観的精神」の部、「都市生活」の章を参照して貰いたいのです。都市生活は、ヘーゲルが言うには、土から出て土に汚れている二つの原則、つまり同業組合と警察に基礎を置いているのです。この様な考え方にまで遡行しない者は、政治的に盲目になるでしょう。（完）

このヘーゲルの哲学は私を喜ばせます。しかしながら私は、全然真面目に受け取っていません。土の精神との一致は、瞬間的なものでしかありません。それは政治的飛躍でしかありません。正しく言うなら私は、物語を信じない以上にヘーゲルを信じていません。これは既に、大したことであるとお分かり戴けるでしょう。でもデカルトは私にそれ程の幸福を与えませんでした、確実さをより一層多く与えてくれました。私の思想が如何にして満足するまでになったかを、私が理解して貰いたいと思っているとしても、今後も私を支えてくれるのはデカルトです。デカルトの研究は、他の多くの人々にとってもそうですが、私にとっても本職であり、『省察』や『精神的指導の規則』や『情念論』を読まなかったり説明しなかったりする年は殆どありませんでした。余りに有名な『方法序説』には、敢えて人は殆ど触れません。不可解であるからです。しかし『哲学原理』は、何時も私の心を奪いました。この探検者の歩みと、道具と武器を手を持つ人間の平穩を、私は模倣しようと試みました。しかし結局のところ、その人間は神秘的で気難しいものです。彼は孤独の中で思考するのですが、それは彼自身のためであり、人を改宗させる威厳に満ちた情熱などは全くありませんでした。従って彼に弟子は一人もおりませんでした。その弟子とは彼が満足出来た者という意味においてです。人は彼の信じる術を何も知りませんし、一致する迅速さも知りません。彼は率直さを情念として、そして執念として恐れていました。従って、反論者を一人も出さないように多くのことに務めました。俗語で書いた彼の作品『方法序説』は、助言者としては何一つ語っていません。寧ろ、デカルトの精神の遍歴を語っているのであり、人は好きなように考えれば良いのです。助力を求める人々には冷淡なこの無頓着さ、もしくははほぼそれに近いものも私には理解出来る行いです。同様に私が持っている有名なハルス(1)の肖像と幾つかの複製を大いに熟視したので、私は国民的なジャンセニストをついに認めました。彼は従順ながら反逆の人であり、非の打ち所がない人でありながら怪しく、彼の中には異端が見えながらも押さえ付けていて告解を見通す人です。従って彼は救済のための商売はせず、免罪符を買うことがあっても売ることはありません。そして彼は、先生とするには恐ろしい人です。「間違える人が、又一人いる」と彼の眼は言っているように見えます。

それ故に私は、横の方から言ってみれば彼が気付かないように、彼を観察したかったのです。彼のことは殆ど知られておりませんが、彼の顔立ちは生き生きしています。世界を軽蔑しないで彼は一生涯、修道士のように隠遁していました。青春時代は軍隊で過ごしましたが、感情的には混乱の時代にあって、或る派から他の派へ仕えた傭兵と大差ありませんでした。彼は、健康の条件の一つとして、脅威と危険を探したのでしょうか。朝寝坊が好きで、恐らくすっかり目覚めないで長い間熟考するのが好きだった彼は、怠惰な軍隊に満足したのでしょうか。私はそうだろうと思います。彼は目覚めている時は快活で、短気で怒りっぽい人物でした。多分、研究によって極めて不精でもあり、逃げ去った真理には手を伸ばすことも出来ないのです。トゥレーヌ生まれのこのブルターニュ人は、私たちの間に沢山の兄弟、何事にも自慢しない沢山の一瞬のデカルト

を残しました。私は戦争中の大変に短い期間、ジャンセニストで理工科学学校卒業生であった老少佐と知り合いになりました。ところが彼は信じ難いことを除いて何でも知っていましたが、何も信じていませんでした。彼の勇気は動揺しませんでした。彼が自分の国を愛しているかどうか私には分かりません。断言はしません。確かに敵は、彼にとっては刺草（いらくさ）が刺すようなものであり、その敵の役割を演じながらも関心がありませんでした。親密であっても冷静です。今でも私は、彼の蒼白い両眼が見えます。兵士たちは彼を崇拜していました。それはデカルトにはありません。何一つデカルトにはありません。しかし結局のところ、私が知り合った人々の中で、彼は最も自分を見せびらかさない人です。私の子犬のようなふざけ回る動きを我慢するのを教えてくれた人々の一人です。愛情では何事も解決しないことを私は覚えました。

それでも良いです。でも、デカルトはどうなのでしょう。もう一度私は、デカルトと歩調を合わせなければなりません。でも、私が余り好きでないペギーは、デカルトを「極めて正しい足取りで出発したフランスの騎士」と呼んでいました。これは上手い言い方です。しかしペギーは、善良であろうとして、余りに善良過ぎました。私はデカルトを社会主義者とは理解していません。この冷静なデカルトに私が感じているのは、救済は握手で行われることはないだろうということです。救済から私は皆と同じように、魂の正しさと健全さを理解します。しかしそれは人が魂を気にするや否や、この世よりもあの世におけるものなのです。ところがデカルトも、自分の魂を気にしています。でも不可思議な流儀です。手始めにデカルトは、それを戦争へ連れて行きます。これは魂を肉体から分離する確実な方法を、永久に逸らせるためであると私は推測しています。その様なことは思考するには非常に危険です。思考することが危険の権化になります。しかし魂と肉体の分離に関して私たちの兵士であるデカルトは、この激烈な作戦の英雄です。そこには何の甘さもありません。最早、夢を見ている暇はありません。幽霊や夢を殺すために、想像力を貫くことが重要です。そしてこの戦術上の策略によって、想像力が真実になる時には、その想像力を捕らえるのです。火の側にある私の安楽椅子と火箸、それら全ての事物は疑う余地がありません。私は穏やかで情熱も心配も無く、母なる自然によって保証されていますし、飼い犬のように感謝していますが、これら全てを拒否しなければならない、とデカルトは心に思っているのです。それは私が、猫との会話を拒否するようなものです。というのも、どちらも同様に難しいからです。剣を風車のように振り回す前では、動物の魂もこの世の魂同様に永遠に飛び去ったのである、と私は考えなければなりません。それが絶対的懐疑の意味です。この懐疑が偽りと判断することよりも重大な誤りは何もありません。又、これ程広く一般的になっている誤りも同様にありません。何故なら、この役を真剣に演じている人間も殆どいないからです。思い出してみると、ラニヨーは私に多くのことを教えてくれました。というのも、彼はついに懐疑論が真実であると言ったからです。それは私が考えるところ、人は何でも十分に決して思考しないし、そのことを考えないで死んでいるのであり、それが魂であるからです。魂は信じやすいものを信じて死にます。プラトンは既に、その様なことを言いましたし、考えもしました。

以上の様にしてデカルトは感覚の分析によって、夢によって、ついには〈悪魔の霊〉によって

信じることの幸福から逃れますが、それは現実の出来事以上に最も驚くべき推測です。〈悪魔の霊〉は、そこから現れて再び私たちを欺くことを覚えたので、推測が恐ろしいのです。全ての観念は、それが現れるであろう唯一の事実によって偽りになるでしょう。しかしながら、私が騙されないと確信するには、判断するのを拒否することで十分です。この保留地点で、デカルトは自分が自由であることを認めたのであり、精神であることを認めたのです。精神とは否定すること、拒否すること、経験の断片や観念も全てをいい加減な処で投げ捨てるものです。人は全てを拒否すると、全てを手に入れます。このことは重要ですが、福音的方法がここでは神秘的な啓示を見出すことに注意して下さい。デカルトが悪魔を祓うと、真の神が現れます。いいえ、そうではありません。神は現れません。神は自らによって、神が現れるという間違った証明を与えたりしません。私は本当に現れるという意味で言っているのです。それは私自身の裡で後退することを信じないためにも、真の信仰まで私を訓練することです。

如何にして私がそのことを探ったかは次のとおりです。デカルトは神を求めています。私にはこの言葉が魔力に溢れていますが、受け入れます。何故なら、結局のところ主観的と呼ばれている精神は、あらゆる見せかけを打ち破る懷疑によって繰り返し殺されているからです。「我思う」は純粹ですし、殆ど無に帰せられていながら、やはり全ての人々にとって何時でもそれはあらゆる可能な思考をその中に含んでいます。私が最早間違えないように決心するや否や、私が求めるものは思考です。私の思考ではありません。それが奇妙なものであっても、私の〈自我〉ではなく、一般的な〈自我〉です。精神は人間を超越しています。あるいは人間は人間を超越しているとも言いましょう。ここでも又ラニョーは、主観的認識はないと言っていたことで私を助けてくれました。私はそこで十分に夢想したいと思います。というのも、それは自発的な夢想であるからです。私は〈神〉も創るでしょう。何故なら望んでいるからです。そして、デカルトが私を明白に招いてくれるように、もしも私が自由な〈神〉を求めたなら、私が見付けるのは暴君ではありません。それは寧ろ腹心の友であり、もっと適切に言うなら人を服従させることよりも、人を自由にさせるのを愛する人々に似ています。ここにあるのが本当の神秘です。もしも人が望むなら、遙か遠くへ押し進めることが出来ます。もしも人が望むならです。その様なものが憲章です。その時は地上の至る所に、皆の上に、結果や奴隷状態への軽蔑を降らします。けれどもそれは愛であり、奴隷の自由を信じることであり、望むことです。しかし、望むことはそれを与えることではありません。彼は独りでそれを手に入れるのです。それ故に私は彼の唯一の救助者ですが、彼を放って置きます。恩寵のあらゆる微妙さがそこに宿っています。神は全てを許し、そしてそれは何ものにも前進させないことを良く理解させてくれます。

私はこの雲の中にいるのが気に入っています。私は思索で暖められた部屋へ帰ります。そこでは独りです。そして何も無駄はありません。決して何も無駄ではありません。宿命論は死にました。私の全ての思考はそれを殺します。結果から逆証してみてください。あなたは自分の思考に服従すると仮定して下さい。最早、妄想でしかありません。私がそれを信じているとするなら、私はそれを信じます。これは事実の問題です。そんな風に思考する人間は狂人です。かくして

私は、前衛の先端で出発したデカルトに従いました。それは冒険好きなそれらの思考に従うことですが、それらはあるべきものとしてなければなりませんし、『省察』に見出されるような神の証明を解釈することでした。しかし、私は表面的でしかない文字に少しも拘りませんでした。証明は、疑うことをしない限り、決して上辺でしかないのです。そして証明の中の証明は、やむを得なければまさに証明でなくなります。以上のとおり、不安定な状況が毎朝勇気を望んでいるのです。（完）

（１）ハルス（一五八一又は八五～一六六六）は、オランダの画家。

何事にも時期があります。確かに私は、ありの儘の勇気を私自身で訓練したり、生徒たちに訓練させたいと望みましたが、有名な〈方法〉へも同様に自発的に戻りましたし、ついにその経帷子をすっかり引っ張り上げました。本当のところ、それらは自由や手に入れた明証の規則です。決して忍従する明証ではありません。ご存知のようにデカルトは、フェルマやロベルヴァルたち(1)が楽しんでいて、数学における偶然の研究が好きではありませんでした。デカルトは、こっそり盗んだようなこれらの真実を軽蔑していました。ライプニッツが、幸運な試みでしかなかった記号の運用によって上手く解釈した時、ライプニッツは自分の精神同様に両手からも来たこの好運に満足し、自慢さえもして高く評価したのです。この流儀は今では勝ち誇っています。デカルトは反対に習慣や機械論によって身を守りました。デカルトの『精神指導の規則』からは、そのことが良く分かります。そこではデカルトの研究をより良く秩序立てるのを目指して、簡潔で疑義が生じない認識に戻っていますし、彼だけの意志に基づいてそれらを守っていることを理解して下さい。そこから私もこの自由の先生に感動で一杯になって、最も良く知っていたものに自我を戻しました。そして少なくとも私は、新しい証明をしなければなりません。真理の友たちには恐らく奇妙と思われるこの精神の歩みは、何時も私を留めていましたが、私は真理の貯えを増やさなかったもので、能力という点では利益がありませんでした。しかし私は今ではこのゆっくりとした方法が、精神の教養にとって無益ではなかったと理解しました。結局のところ、数学というものは疑ったり拒絶するところに成立します。始めにそのことが良く分かります。そこでの諸命題は誰にも疑う余地がないのですが、それらは疑うことを主張しています。その意味では人は或る明証を拒否し、別の明証を求めます。

私はメヌ・ド・ビラン(2)に求めたのを思い出します。私は女子生徒たちのために一年間を彼と共に過ごして、全く困難な問題の中でも、この問題に何らかの光明を見出しました。ビランは、盲目の幾何学者がいても少しも驚きませんでした。その上彼は、人がそれに驚くことが不思議だったのです。その理由は、彼には良く分かっていることですが、視覚はありの儘に見て受け取るものを、その儘受け取りますから真理にとっては盲目の感覚です。それに反して触覚は、固体を前にして触れることは望むだけ抵抗の印象を自分に与えます。それは、この著者が視覚は観念論者の感覚であることを述べて説明しているのです。聴覚に関して彼は既に、音声の能力によって前の二つの感覚とは別に分けています。聴覚は私たちに音の世界を創り、私たちによって全てが構成されています。この指摘はビランによれば、述べることでしか生まれない言葉によって語られた視覚と、言葉によって支えられて絶えずその対象を再建する必要性の中にある盲目的触角との間に、大きな相違を生んでいます。それはつまり、真の幾何学者は意志によって自ら盲目になるということが私には良く分かりました。ここから聞く(entendre)という言葉の素晴らしい意味が、理解力(entendement)という言葉を与えたのです。デカルトやあらゆる数学者に戻ると(というのも彼らは名誉の瞬間と報われない細心さを持っているからです)、真の幾何学の

巨匠は、見るものよりも言ったことに多くを拠り所としていて、相当の方法によって任意の対象と一致するよりも、自分自身と一致するのに心を配っていることを私は良く理解しました。でもこの立派な自尊心にも不都合が無い訳ではありません。というのも結局のところ、人間は世界に存在しているのに、世界も人間を忘れることに良くなり得るからです。周知の如く、デカルトは世界へ直進しました。従って純粋数学は、彼の眼には意志の訓練でしかありませんでした。

デカルトが『省察』の中で物質を語るのを適切に工夫して、その後あらゆる威厳を無視してこの観念を勇敢に保持しているのを人が理解する時、それは〈意志〉であると言うのも言い過ぎではありません。そしてこの方法によって、デカルトは本当の世界を発見しました。つまり純粋存在です。従ってその中の全ての人間は、世界が存在していることを知るまで世界は存在しているように見えると独りで言うしかない以上、如何なる哲学者もデカルト以上に非観念論者ではありません。そして肝心なことを要点だけ言えば、デカルトは自由な本質を持つ彼自身の精神との対立を通して、敵対者を決定していたのです。世界は慣性であり、可能な物理学は全てがそこから生じています。私が知った限りでは、何人もの人は岩場の周りの激流に何時も水の渦をうっとり見とれて満足し、この全ての激しい外観は慣性でしかないと言いながら、その時彼は自分が知っていたものを発見したのです。人はそのことを知っています。しかし、それを確かめられるのでしょうか。事物の中に曖昧な魂を仮定したり、まるで実体的偏愛のような観念は、恐らく最も古くて最も根深い誤りです。ルクレティウス自身も一種の意志を原子の中に仮定しました。しかしデカルトは、原子からあらゆる特性とか性質、原子であるというそれすらもすっかり取り除きながら、大きくても小さくても物体は隣接するものから受ける衝撃や刺激によってのみ絶対的になると判断して、その誤りをきっぱりと取り除きました。デカルトの『哲学原理』を読めばお分かりのように、重さを持つ物体にせよ、発光体にせよ、磁石にせよ、如何なる隠れた性質も如何なる種類の魂も、その儘にして置かないように専念します。物理学は最早創り出すのではなく、出来上がっているのです。

その時に私はデカルトの虹を、嵐を前にした人間の憲章と見做すことが好きでした。まさに伝説が語っているのも同じことです。あらゆるものの中で最も困難なことは、伝説を理解することであると私は分かり始めました。それ故に私は、この事例が全ての威光の力を集めているように見えましたし、それはその人間が精神力によって全ての威光の支配者になっているのです。何故なら、最早この虹色の循環よりもこの世で雄弁なものは何もありませんし、これ程思いがけないものも何も無く、激変させられたこの自然の中でこれ以上私たちに似ているものも何も無いからです。風も、この素晴らしい循環を少しも揺らしません。それは循環であり、精神に従うものであり、そして自然なのです。何という契約の徴でしょう。ところでデカルトの精神は、この問題についてのあらゆる好奇心に応えました。それは水滴が一色に見えても、別の角度から見ると別の色に見えるように、至る所から見るような光の屈折の結果でしかありません。従ってその対象は決して丸くなく、幾何学的でもないし神教的でもありません。寧ろ各自が自分の虹を見ているのですから、同じ対象ではありません。しかしながら私は敢えて言いますが、このような考察の後

では少し冷静になることが確かに必要です。というのも既に述べたように、全ての対象は、感覚にとっては外見であり、同様に少なくともそれが全てと関係しているのが見分けられるからです。しかし、この悪魔払いは直ぐに効きません。それ故に私は大西洋へ行き、飽きることなく波を見ましたが、それも又存在するものではありません。この厳格な英知の瞬間は、『海辺の対話』に流れていましたが、それは端から端までデカルト的であり、その信仰によれば、いわば他の言葉からもはね返って来ます。私は、〈宇宙〉について知っていることの全てをこの作品に込めました。そして論争を起こすことなく、全てを私は言うことが出来ました。この慎重さは、私を大変に遠くまで導いてくれました。

それ故に私にも、デカルトが行った魂と肉体の分離があります。デカルトは毎朝やり直さなければならなかったと私は推測しますし、毎分であったとも推測します。そして私たちも同じで、それをやり直さなければなりません。というのも何時も私たちが眠りや休息に戻って仕舞う物質の通俗的観念は、最早生命や感情や精神の観念と同様に、物質の観念ではないからです。存在するものは全てがその意味では物質です。一人の医師でしかなかったロックは、物質が思考したとしても何ら障害を見ませんでした。恐らくこの点でデカルトの物質は、絶対的に思考することが出来ないとは人は理解しました。それは、その法則である外部関係によってあらゆる方法による思考も否定します。しかし、ここには何という混乱があるのでしょうか。そうです、それは思考するデイドロですが、罵倒したり、博愛家として涙を流すのも同一の人物なのです。事実なら何でも構わずに確信し、証拠については造作なく、言葉の最悪の意味において平民である、デイドロ程の人物を、恐らく人は見たことがありません。デイドロはドドナの櫛の木のように、神託に還ることしか出来ませんでした。彼は決して修道院も、自分を脱皮する仕事も、良き娘である明証の涙も、理解しませんでした。既に、食べて消化する如く判断して信じる、パリの完全なる小市民でした。どんな時代にもデイドロは沢山いますし、威圧的です。この信じ易くて疑い深く、何にでも好奇心が強く、人類の熱烈な友人である人物には算段があるのを私は知っています。しかし、動物を少し疲れさせるための、何という時間と雄弁なのでしょう。

体系としての唯物論は、本能でしかありません。観念としての唯物論が本物ですが、それが唯一の本物ではありません。少なくとも唯物論が分かるために、人はそれを否定します。それはデカルトが物質そのものを理解出来るとか、あるいは何であろうと理解出来るのがデカルトの物質ではありません。物質とは、慣性と同じ観念であり、あるいは純粋な存在と同じ観念です。この観念を把握するには、多少なりとも禁欲者にならなければなりません。そこから感嘆や矛盾が、私たちの政治の中まで循環します。何故なら、正義を友とする人々は、唯物論者となって自慢していますが、私にはその理由が良く分かるからです。しかし彼らは唯物論者になることで、お金持ちになって人生を楽しむことしか考えないので、非難されることでしょう。恐らくそのことは本当ですが、史的唯物論の全ての結果ではなく、全ては反対です。その上、全く混乱した観念に従って中傷される人々も、同じ理由から彼ら自身がお互いに中傷することが起こるかもしれません。

コントはこの問題について、他の多くの問題同様に私に教えてくれる筈でした。デカルトから出発しながら私は、何が唯物論であったかを知りましたが、何が間違いであったかを知りませんでした。それは漠然としていますが、その言葉が力強く齎していることなのです。ところがコントは、今では人は理解したことですが、唯物論が抽象的概念であると初めて理解したのです。そして私が前にも言ったことですが、抽象から具象への諸科学の順番を整理して（数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学）、各々の科学が次の科学の最初の方法と最初の手段を提供していることに注目しました。それを仮説と言いましょ。各々の科学は、次の科学について一種の暴君を行使する危険があったことを、コントは理解していました。抽象的なものへのこの自負が、唯物論そのものです。そしてコントは言っていますが、幾何学を代数に従わせることを望み、生物学を化学に従わせることを望むのは、やはり唯物論であるからです。以上は、コントに見出される思想の一例ですが、何処にも無いものです。（完）

（1）フェルマ（一六〇一～六五）やロベルヴァル（一六〇二～七五）は、いずれもデカルトやパスカルの時代の数学者たち。

（2）メヌ・ド・ピラン（一七六六～一八二四）は、内省的方法で主意主義を主張した哲学者。

ところで、私はもう一度デカルトに戻らなければなりません。それというのも教義の一点として私が大きな結果を引き出したからで、そのことは殆ど知られていません。すなわち『情念論』の中で定義されている高邁な心が重要です。私は戦後の十五年間で、高邁な心という美しい言葉を何度響かせたいと思ったことでしょう。デカルトはその言葉を寛大さという言葉よりもお気に入り、それは実際に魂の活動よりも寧ろ均衡を表しています。そして恐らく私は、この短い教義から危険を伴う結果を引き出したようです。私は一度も歴史家になりませんでした。寧ろ私は、この本を読んでいたのと同じ時期に、私の糧を著者の中に求めました。著者が思考したのを知るには、別な風に知ることしか出来ないと思われまふ。著者が如何に思考したかを知るのに人は細心になっていて、それが正しく思考されているかどうかを知ることではないのに私は驚きます。兎に角、今の私は近視眼的批評家をまさに馬鹿にしている、最早歴史家には全くなりたくないのは事実です。

『情念論』は、私が最初に本当の読書をしたものの一冊です。それは私の声しか聞かなかったと言いたいのです。その結果は名状し難い困惑でした。私は、同僚の一人と或る術学者が聴講者であった彼らの前で、この書物に関する講義をした思い出があります。彼らは皆、私が極めて単純に書かれていながら迷い、哲学者たちに向かって少しも書かれていないのを見て、驚いていました。そして実際に私が、大したことではないものと理解していたもので、もしも私が感嘆されていると言われているものをその書物から除けば、全ての部分が明瞭なのです。しかし全体として私は、全く遙か遠くにいました。私は頭の鈍さと共に、何時も何故迅速で断固として過ごしたのか、理由が分かりません。実際に私が〈高邁な心〉を読んで一つの観念として変わるには何年もかかりました。それは、人が自由であると知ること、自由になると確信されることを実感する、情熱とか情操の感情です。この〈高邁な心〉が決して自由意志を蔑ろにしないことを固く決心している表現を、まさしく発明していたとも私は信じています。実際には、それは削られた文章になって仕舞い申し訳ありません。しかしここで私は、デカルトを裏切っていないことを十分に確信しています。勿論、新しくて余りに生き生きした光に先ず全てが眩惑されても、私は殆ど気にしませんでした。感じるとは何であるのか、それを私に説明しようとした人は、少なくとも誰もいませんでした。最も平板な経験主義がこの地上全体を占めていて、感覚とは全く自然の儘の事実として受け取られていて、全てがそこから出発していたことを私は良く理解していました。私としては、そして私がそこから見詰めた限り、自然の儘の感覚は、感じられないことを反対に理解していたと思いました。更に、動物たちは少なくとも存在していることを知るのを拒否しているというデカルト的立場に導かれて、私は私たちの思考の最も低い部分は何も明らかにしていません。そして最も弱い意識が常に非常に高い意識になることを私は大胆にも主張しました。この様にして私は現代の最も強い偏見に反対して行きました。そしてあらゆる方法で、私が全ての博士たちから厳しく批判されなければならなかったのは、私が無意識や潜在意識や識閥やその他

猿の哲学論文を四肢で歩いて崇めなかったからです。それには何らかの特別に大きな恐怖がありました。というのも慎重な精神には魂のこのメカニズムが余りに疑わしい、と私は何度も気付いたからです。しかしその様な明白な批判に対する最高の困難は、それに係わらないようにすることでした。

既に述べたように、私は道徳的判断を意味する言葉以外に、意識の言葉に他の言葉を決して許さない普通の言葉によって助けられました。そして人は非難されないなら決して自らを知らない、と時々考えるようになりました。このことは自分から離れることであり、それと同時に自分を認めることでもあります。というのも何か内面の葛藤によらないとしても、何故人は目覚めるのでしょうか。しかし、これらの展開は、私が恥ずかしく思った曖昧さに私を投げ入れました。それ故に無意識とは、普通の言葉が認めているように自分で判断しないものであると言わなければならなかったのでしょうか。それ故に道徳心の無い人間は、自分自身を知らないのでしょうか。しかし、道徳心の無い人間はいるのでしょうか。私が見た限り、全ての人間は自分の名誉と呼ぶ何かのために、自分の人生を危険に晒す準備ができています。そして、人間が更に悪徳や犯罪を負わせられれば、それだけ益々名誉が屢々強くなります。以上の様に、私たちは自分の運命を思考して、麻痺する観想的生活を送る人々から遠く離れて行きます。反対に最も普通の人、運命が告げられる前に、最も軽微な恥辱でも受け入れられないが如く立ち上がり、行動し、自らに危険を負わせて一身を捧げます。この様な人々は高邁であると言われていています。これはデカルトの権威と結び付いて、多くの注意力を当然受け入れるべきです。

英雄たちにも維持出来ない陣地のように、その時は善悪が地に落ちるのを人が見るのも本当です。何故ならもしも自分の危険に復讐するなら、それが許されるとか禁じられているとか、決して自問しないからです。その時の彼は、如何なる外部的存在への恐れも尊敬もなく、彼自身が独りです。その時は彼に逆らってはいけません。彼は善ではありません。英雄も悪の種子を蒔きます。一瞬毎に私は、英雄たちが人生の息吹を持つ限り何のものにも止められないことによって、私も全ての人々も死に脅かされているのを理解します。私は英雄たちを時々疑いますが、理解しているようにも思います。英雄たちは自分の運命を創るように強く主張します。決して受け身の態度を取りたくないのです。譲らねばならない必然性がある時でさえも、立ち上がる元になります。まるで不名誉は、全ての譲る場合にあるかの如くでした。もしもこれが英雄固有の自由意志を感じるのではないなら、一体何なのでしょう。人は低次の力に譲るや否や、魂を裏切るという意味でないとしても、モリエールが如何なる意味で人は自分の魂を裏切ると言ったのでしょうか。それは常に自由意志を失うことです。既に、殆ど何時も最悪です。そんなことは決して信じないことです。そんなことを信じる人々を馬鹿にすることです。ところで人間は、犬のように一個の砂糖を前にして美技を行うように出来ているとは決して信じないのを、私は沢山の証拠から理解しました。犬は、最も強くて快い匂いによって導かれます。犬は、匂いや色や音に感じ易い繊細な機械です。それらのあらゆるものに誘導されます。人間は誘導されるのを拒みます。脅迫に負ける人間は、殆ど誰もおりません。私は、この高邁な動物が戦争を起こすのを見たことが

ありました。でも、動物が戦争を起こさないことも私は理解しました。そして動物には卑怯なものは何も無く、全て人間にあり、行いたいことがあっても決して行わないこと以外に何があるのでしょうか。それ故に自己の超克があります。本来の人間になる脱皮があります。魂と肉体は分離しなければならない、と私は言いました。人間と動物が分離しなければならない、と言うのも同じです。

この戦いは実感されます。それは最も激しい苦しみを引き起こします。しかしその勝利は、最も心地良くさせる喜びを与えてくれます。自由であることの幸福が唯一の幸福であり、内的奴隷状態は唯一の不幸というのは真実でしょうか。今ではそれ以上に言うべきことがあります。完全な奴隷状態は自分を何も認識しません。モロッコで両眼を潰されて挽き臼を回転させるために繋がれていた囚われた将校が発見された時、彼は全ての意識の光を失って長い時間が経っていました。将校が発見されたその時、私たちは大なり小なり勝利しか意識しなくなるでしょう。そして例えば、絶対的に服従するのであるなら恐怖は認識しませんし、それが経験というものです。恐らく、所謂純粹感覚に人は絶対的に服従しているなら、最早認識されることはないと考えべきでしょう。意識とはそれ故に、自由に疑うことにあります。しかし私は、私の仮説をそれ程押し進める必要はありません。自由意志による戦いが強制と理性によるあらゆる段階で、それ自身によって喜びと苦しみが混じり合った愛情になるのを、私は気付くだけで十分です。そして余り緻密にならずに、その時の苦しみは何時も一種の喜びによって照らされているとも言えるのですが、その代わりに共通した証拠に従えば、絶望で一杯になれば感情を奪ってもいるのです。彼の意識を助けることは、力強さと意義に溢れた表現になります。それらは一般の言語使用に戻って来ます。この様に描かれた人間は、高邁な心による激怒に従って真の人間、愛すべきも恐るべき兄弟になるであろうと考えさせるものです。情熱は全てが高邁な心ですが、自分を救うために絶えず活動を継続しているのであって、それなくしては腹を立てた人間は単なる動物であると気付かなければなりません。これらの感情の形態を書こうとすると、私は時々、愛や吝嗇や野心の真の活動を述べるのが可能と思いました。文学の中に入るには、哲学から出ることであったと言えるでしょう。私がまさしくその様に理解したのは詩人や小説家が、自分を認識する術においての最初で最後の師であるというのを長い間規則にして来たからです。私は敢えて言いますが、私が試みた人間描写と、哲学者たちが如何なるものであっても僅かな片隅で発案した理論との間には、最早接点はないのです。（完）

私は従って愛を第一に吟味しました。先ず気付いたのは、自由のない愛は、愛ではないということです。自由がなければ、自分が自由であると信じませんし、最早他に如何なる自由も信じないと私は理解します。本質的にはこの人間嫌いの人は、実際に愛の劇である有名な喜劇の題目にもなりました(1)。幾つもの発条が現れます。情熱が湧き上がり、そして再び沈みます。情熱は如何なる段階にも止まることが出来ません。もしも再び湧き上がらないなら、沈んでいなければなりません。高邁なアルセスト(2)は、自分が自由であることを知りたいと思いますが、それは出来ません。彼は、セリメーヌ(3)が自由であるように望みますが、それも出来ません。ここで読者は私より早く跳び上がります。というのもこの主題は、全生活が彼のものであるからです。私としては何時も極限に興味があり、自由であることを少しも気にしないアルセストに、人が考えるかもしれないことを自問します。それはアルセストが自由な人を愛さず、愛されもせず、気に入ることもなく、尊敬することもなく、猫を捕らえたり逃がしたりする様に恋人を捕らえたり逃したりしていることです。この表現はバルザックのもので、彼が応用している『幻滅』のフロリーヌは、全てが暗黒の地獄から遠くありません。しかしながら彼女は、一種の高邁な心によって逃げ出します。しかし女性の交際まで分析を進めて下さい。私たちは殆ど地獄にいます。そこからは、何の愛もない眠りの深淵が見出されます。もしも愛がそこで生まれるなら、愛は自らを解放しますし、他者も解放します。この弾道は信仰が無いなら高く上がりません。あるいは寧ろ最初の疑問に負けて仕舞います。アルセストも最早高く上がることは出来ません。それはセリメーヌの明らかな下劣さにあると言われます。でも違います。というのもそれでは全ての問題を取り除いて仕舞うからです。寧ろ、悪魔のようなやり方で自由なセリメーヌは完璧に自由です。アルセストが望んだ様に、全てが完全になるのは少しも望んでいないと私は思います。アルセストの愛が再び燃えるのもそこです。何故でしょうか。セリメーヌは絶えず彼女自身や彼自身に従うために十分に愛さなければならなくなるでしょう。彼自身というのは、修道院を意味します。そして女性たちの様に男性たちも修道院を生みました。修道院を迷信で説明するのでは非常に物足りないものです。修道院は人が自由に愛する場所であり、最早強制出来る場所ではありません。私は、大戦後に書いたプロポ集にこれらの分析を沢山所収しました。これらの分析そのものには少しも曖昧さはありません。それらは疑う余地が無いのです。寧ろ曖昧さはそれらの思考の結果と、他にもっと隠されている観念とに結びついた関係の中にあります。それ故に私は、こう言って良ければ私の「精神の記録」であるこの部分について少し述べて行きたいと思います。

確かに愛する人々は如何なる人々も、第一に魂を愛することに多くの驚きを持ちます。しかしながら、媚薬の使用が彼に嫌悪を催させると理解するのは単純です。それは彼がそれを使用しないとやりたいものではありません。彼は高く低く、地獄から天国へ、天国から地獄へ行く情熱を消す矛盾は、全てがそこに集中しているのが分かります。何冊かの出版物からお分かりになったと思いますが、私が読んだのはスタンダールとバルザックです。ユゴーとトルストイも、私のお気

に入りの哲学者のものよりも沢山読みました。ここでお分かりのように、読者の喜びが私の研究の基本でしたし、それらの探検が表面的には一致していない様に見えても、ついには一致して出会う様になりました。私はここで小説家や詩人たちを引用して、私が自由の仕草を通して真実とと思っているものを、彼らが発見していたことを、私のやり方で説明しなければなりません。コルネイユにおいて非常に輝き、ルイ十三世風でもあるデカルトの観念が如何に体系的一覧に沿っての愛情を最初に論じたか、そしてそれ以前に神秘的な〈神学〉の意味合いが全く人間的であることを今一度発見することに私を導いたか、それらに気づいて戴ければ十分です。神は高揚した魂の本質的な証人であり、それは私たちの叫びも率直にそれを表していて、更に罵り言葉もそうであるのが極めて一般的であり、常にあらゆる意味を私に与えているように見えました。それ故に〈神〉は、あらゆる愛という想像上の家族の様なものでもあります。しかし、〈神〉はまさしく想像力以上のものです。〈神々〉のことはもっと後で述べます。

私は、味も素っ気も無い乾ききった吝嗇家が、やり方によって神秘的になり得るとはとても当初は考えませんでした。けれども屢々私は、吝嗇家について一種の名誉回復に導かれました。何故なら結局のところこの情熱には、無私無欲の公正な態度があり、富裕に対する大変に賢明な見方もあるからです。それはアルパゴン(4)の激しい肖像と一緒に出来ませんでした。しかし恋人たちにも地獄があるように、吝嗇家にも地獄があったのはまさしくあり得ることです。でも何故でしょうか。吝嗇家の楽園は高邁で自由であり、そして自由の友人なののでしょうか。私はまさにそうであると思います。情熱に関するこれらの驚異的な分析は、お金や高利から生まれるのですが、私には経済学を明らかにしてくれます。しかしここでも又、哲学の本よりも私が発見したのは寧ろ小説の中でした。今は、私が偉大なるディケンズのお世話になったものを彼に返す時です。読者は、コパフィールドの上着を購入してもお金を支払おうとしない吝嗇家の商人のことをご記憶でしょうか。苛立っている吝嗇家のこの亡霊は、吝嗇が決して避けられない矛盾によって動かされています。というのも、吝嗇家は盗みを働きたいのですが、盗むのは恐いからです。そして商人は誰もが、誠実さが商売の魂であることを良く知っています。私はここで吝嗇は誠実であること、つまり心が引き裂かれて悲痛でいることに気付きます。

私の発見はこれで終わりではありませんでした。労働が市場を豊かにすることも吝嗇家は良く知っています。耕作すること、取り入れること、穴を掘ること、採掘すること、運搬すること、それらは富裕の源泉です。そして、吝嗇家は偶然に生きるのも決して好きではありません。反対に、秩序や几帳面さや安全が好きなのです。それ故に、吝嗇家は浪費家を屢々利用しますが、決して浪費家が好きではありません。アルパゴンが物を貸すのは、吝嗇の第一段階でしかありません。暇人たちに貸すのは長く続きませんが、反対に労働者に貸すのは何時までも取引になります。吝嗇家は労働者を探します。吝嗇家は労働者が好きです。しかし取分け、吝嗇家は吝嗇家を探します。そしてそのことは、吝嗇の農民から銀行家までの相違を私は考えて仕舞いますが、銀行家は農民を最良のものに育てて行きます。一方がもう一方に鞭を打っているこの二人の吝嗇の関係は、至る所で見受けられます。若くて熱心な女中は、夢の中で家を建てることを考えます

。もう一人の吝嗇家がそのことを見抜いて、彼女にお金を貸します。吝嗇家は、良く知っている吝嗇家の美德に賭けます。吝嗇家は馬を大切に扱うように、債権を持ちながらも大切に扱います。何故なら仕事は一連に繋がっているからです。例えば、もしも家を建てるとか工場を建設するなら、石切場や鉱山が重要であり、同様に鉄道も道路も航行も重要であるからです。以上は吝嗇家がこれらのことを知って、出来ることならその貴重な活動を全て速めたいと渴望する理由です。常にもっと稼ぎたい欲望と労働の連鎖が分断される恐怖は共にあります。この状況は殆どが瞑想的であり、まさしく公益を瞑想するのも同じです。年齢の影響を加味するとこの種の活動は、吝嗇から美德を完成させますが、それは節制です。この様な仕草を取ることで最初は吝嗇になりますが、結局は解放されるようになります。というのもこの仕草は、無用な支出であるからです。しかし、その時は何という多様性がそれらの仕草にはあるのでしょうか。泥棒は殆ど何時も浪費家です。泥棒は、浪費すべきことしか好きではありません。吝嗇家はお金を貯め込みます。しかし全てが擦り切れます。それ故に吝嗇家はお金を愛します。土に埋めた宝物を持つ吝嗇家も、既に吝嗇の一変種です。そのうちの高利貸しも、もう一つの変種です。符号と信用と約束で生活していて、公正な法律を尊重します。事務機構を管理するのに巧みな人に関しては、吝嗇と言うよりもその意味では寧ろ屢々浪費家です。自分自身や企業のためなら、お金を支出するのも厭いません。彼らは全体で、高利貸しが隠れたリーダーになっている大企業を形づくっています。

稼いでいても、必要性を越えて非常に稼ぎたがっている吝嗇のことを、人々はびっくりします。吝嗇の乞食が宝物を守って何もそこから生まないことも、人々はびっくりしています。これらの逆説は、愛と同様に欲望が吝嗇の中にも支配されているのを理解させてくれます。そしてもしも、吝嗇が時として事業の全ての道を占めるまで企業に拡大するなら、それは取分け人がなし得ることと、なすべきことを見るからであり、又誰もが彼のように見ていないと思っているからです。私はそこに一種の野心と愛を見出します。結局のところ認識によって、そして秩序への愛によって、吝嗇家は無料診療所や学校から病院や寮まで全てを設立します。

私はそれ故に、愛の如き吝嗇という一種の弁証法を見付けました。それからあらゆる感情の如きあらゆる情熱の始まりに戻りながら、私は構造と好機による活動で大変良く名付けられた情動という感情をもう一度検討しました。私はそれを痙攣的なものと理解しました。というのも情動は他のものになり得ず、対象さえも破壊するからです。最高の吝嗇は、食べることの陶醉に見ることが出来るように思います。しかし私は、翌日に備える思想に驚嘆しました。最高の愛とは気に入られることへの陶醉であり、一種の舞踊、化粧、諂いであるように想像しました。そこにも私は同じ思想を見出しました。翌日への恐れです。お互いにおいては人間的完成に大きな関心がありながら、競争相手への憎しみもありますが、それに相応しいから憎むのか、相応しくないから憎むのかも少しも分かっていません。嫉妬によるこれらの矛盾が眠れなくして仕舞います。しかし注目すべきであると思われることは、これらの矛盾は認識が齎し、熱狂者は真の認識を渴望していることです。というのも恋する人もけちな人も、疑わしい認識に耽ることはないからです。虚栄心は人が欲しているものを信じて夢中になるのを通して、情熱の始まりになるのは本当

です。そこには本来的に陶醉に依存するものがあります。しかし、熱狂した人は直ぐに真の打算に到達して、極めて必然的に一種の眠りによって虚栄心に再降下します。それらの情熱においては何もかも安定していません。如何なる情熱も、情動と情操の間に自らの場所を見出さないものはありません。全ては刻一刻と変化します。盗みとか強姦の観念は、吟味を拒否している様なものです。しかし如何にして吟味を拒否するのでしょうか。全ての熱狂家は、金の重さを量る人なのです。

以上によって私が如何にして情動、情熱、情操という一連の重要な感情について研究したか、お分かりのことと思います。そして私は、情操が絶えず情動と情熱の上に乗せられることによってしか認めることが出来ませんでした。というのも、単に愛するとは如何なるものなのでしょうか。そして単に管理するとは如何なるものなのでしょうか。これらは生気の無い余りに安易な企てです。それは真理を恐れることなく、真理を愛する様なものです。静寂主義者は自らを美德と信じています。反対に真の信仰者は日に十回も神を憎み、そして否定するのを感じます。又、交易の真実を始めに吝嗇であることで憎まれ、そして常に憎まれていることを認めなければなりません。恋愛の真実も始めは恋人に憎まれ、そして常に憎まれていることを認めなければなりません。もう一度私は、宗教がまさしく意味の無い偶然の出来事と相違しているように思えました。そこでは現世に流れていた真実とは別の真実、別の価値が示されているのです。

中年の情熱である野心は、愛と吝嗇の間であって、情動、情熱、情操という三つの感情の中に最も入り込めないもののように思えました。それは結果に走り、何時も暴力的であり、そこに自分の愛する存在を見出すからです。しかし、それは何ものでもないと思います。私は一九三〇年代から手を付け始め、何度も書き続けた『ドウニ又は野心家たち』の表題にもなっている対話で、野心家を打ち負かし、止めを刺すことを強く主張しました。この作品は幸福ではありませんでした。それが何時完成するかどうか分からないからです。でも私が、事物の弁証法を疑っているようなことはありません。それとは反対に私は、力を持った野心家たちが虚栄に余儀なく陥ることを何時も知っていました。野心とは説得することであり、遠くまで導きます。シラクサのディオニシオスとプラトンの口論は、一種の愛する者たちの口論です。吝嗇と愛する者のそれらの対話者たちは、沸き立つこの世での活力を全て持って来ていました。彼らが二人とも冷たく死んでいるのを私は恐れます。そこで私が思い出すのは他の一連の対談ですが、その表題は『音楽家訪問』です。それらの人物たちは、生まれて来るのに時間がありませんでした。それはベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタを分析することを目的と見做して、私が正しいと思って分析的に解く鍵によって行うことでした。そして、その観念は人物たちを貪り食う様なものです。私が思うに、人は物語によってしか人物になりませんし、完全に不条理の連続です。そして私が野心家に戻るなら、彼は友情の価値を知るために余りに人を殺さなかったのであると私は考えます。(完)

- (2) アルセストは、『人間嫌い』の主人公で、潔癖で正義感が強く、人間嫌いである。
- (3) セリメーヌは、アルセストが失恋する女性。
- (4) アルパゴン、モリエールの喜劇『守銭奴』（一六六八）の主人公。

人は恐らく気付いたことと思いますが、長年に亘る読書、経験そして考察の間に、私は人間嫌いが具合良く治りました。又、そこから多くの人間嫌いに傾かなかったのも本当です。その反対に私は、最悪でも人間に驚嘆していましたし、最も卑しい人間の世界に動物が少しは近付いていると理解することはありませんでした。動物は戦争を起こさないとと言われていましたし、書かれてもいました。しかし、そのことで動物を人間よりも次元を高めたいと思ったならば、それは間違った思考でしかありません。しかしながら、馬鹿なことを言いたいと思うにも人間には偉大さがあり、偉大さを馬鹿にすることにも偉大さがあります。人間はあらゆる障害を乗り越えるのを誓ったのである、と人は言います。それはまさしく高邁な心による逆説です。自分で自由を知るこの陶醉は、自分本来の存在を中傷し、重力に従って眠らされている美德を全て疑ってかかる義務を負っているのです。そして、その様なものが美德の一般的教義となっても、もしもその教義が傾き続けたなら、それは最早美德でなくなります。ストア派の禁欲主義者たちとカントは、その十字路でこの偉大な思想を手に入れました。彼らは神々を考慮して、それを穏やかなものにした。というのも、もしも監獄が恐くて正直になるのが下劣であるなら、地獄の恐怖によって正直になるのも下劣であるからです。そして〈神〉への反抗が、それ故に最高の義務になります。従って私の若い生徒たちが爪を使ったかの如くしてカントの道徳に反対しようとした時、生徒たちが行ったことを大変に良く知りました。彼らはその後、姿を変えて社会主義者になりましたが、私には同じ様に見えます。彼らは、あるが儘の秩序による志願兵です。ところで美德は不安定で軽業的であることを私は知っています。美德は何時も最後には寝て仕舞います。しかし私は人間において眠りの中に既に、過剰のものや単に脅威を表している自然よりももっと大きな拒否に気付いていました。眠る人間は、慎重さに疲れさせられます。同様に夢を見る人間は、目覚めなくなるまで恐怖を楽しむので、夢にも偉大さがあります。それ故に不眠の中には卑小さがあります。してみると確かに、騒音で眠れないことは動物性の一つのしるしです。動物性とは健康のことであると言われていました。でも私はそれを全て信じません。動物は私たち人間よりも多くの病気に罹りませんが、それは動物が少しも考えないからです。人間は考えます。そして、自分自身の動物性に従うのを受け入れません。そこでの激しい情熱は、全ての病気を複雑にします。人間が癒えるには、魂の偉大さによるしかありません。

ここでは小説、演劇、歴史が、哲学者よりもより一層良いものを私たちに教えてくれます。何故なら人間は不可能を試みなければ、退屈するからです。そして、私たちは必要な行動を再開してそれを理解し、優雅に飾り付け、その前や向こうの彼方へ行くのであると私は言いたいのです。何故なら優雅さは無償でもあると言いたいからです。戦争は、もしも人間が既にその栄光を軽蔑して、他のぼろ服へそれを投げやることが出来ない限り、今日でもなお最も高貴な仕事であり続けます。権力の軽率さの一つは余りに強制することです。ヴェルダンの前線にいた二人の陸軍中尉は、陣地を守り切れないと判断して、兵士たちを撤退させる決心をしました。二人は直ちに

銃殺刑に処される恐れがあったことを承知していましたが、事実銃殺されました。この退却には危険が確実にあり恥辱でさえあっても、最も栄光のあるものであったのを人はお気づきでしょうか。というのも恥辱も人間に圧力を加えますし、人間はそれに勇敢に立ち向かうことを知っているからです。自ら進んで地獄に落ちた悪魔の観念は、神学者たちを高める観念の一つです。

自由意志の領域は殆ど探究されることがありませんでした。道徳家たちは、大変に有益な自分たちの戒律に挑戦を受けるのではないかと恐れます。指揮官たちは、極めて十分に武装された自分の命令に抵抗されるかもしれないと恐れます。この御し難い正直者を如何に支配して良いのか誰も知りません。そして、何処まで勇気が行くのかも誰も知りません。というのも何も恐れていない者を恐れさせたいと望むのは狂っているからです。それ故に政治は極めて奥深い術策を弄します。私は、この軽蔑すべき所業が指揮官たちに反対して未だ軍隊を訓練していなかったのに、驚いています。人間嫌いはそれ故に国家の教義です。そして兵士が殺されるのは恐怖からであることを証明してやることは、極めて精巧な仕事です。軽蔑する術はそれ故に、指揮官の術の一つです。私は緻密さへ赴き、自由の教義がこれに極めて近い関係にある恩寵の理由と同じものによって、絶対的に緻密であることを私は確信しています。反対に自然の力に関する教義は、全く粗雑です。私が気のない思考を時々憎むのも、その偉大な言葉で一杯の動物的な意味の中です。もしも動物的であるのが真実であるとするなら、諦めて十分に受け入れなければならないと人は言うでしょう。しかしそれはまさに、動物に反対して人間の味方になることなのです。理解出来ないのを拒否して思考する方法それ自身が証拠であり、自由の証明です。私たちが思考において自由であると仮定すれば、何らかの実例がなければならず、泥の教壇から哀れな博士を降ろすには幾つかの成功も必要です。しかし実を言えば、成功は輝いています。愚かさの普遍的仮定は、如何なる宗教も如何なる栄光もマキャベリ主義や卑劣さによらなければ説明しません。これらは人間に対する二つの侮辱です。指揮官たちは、敢えて言ったり無視する術を知っています。そして彼らの術策の原則は、人間を信用することなのです。

悪徳そのものも、動物的なものだけでは上手く説明出来ません。それで自由の愛や自由を望む全ての意味合いを示しても、十分ではありません。もしも愛の否定が、動物がそうである如く甘受され無言であったなら、動物たちが正しいと信じることもあり得るでしょう。しかし愛の否定も、愛そのものよりも度を過ぎしていない訳ではありません。地獄に落とされた陶酔がそこで示していることは、罪であるのと同じである如く、少なくとも崇拜したくないものを踏みつける激情に大変近いものです。人は動物よりも無雑作に人間を殺します。そして渇きや大食から来るようなものである完全な陶酔に関しては、反対に人間のしるしを持っています。それは気高い部分の自殺でしかなく、神々に投げつけた挑戦でしかないのです。勿論、人間の全生涯は神々への挑戦であると言いましょ。というのも神々は、全てに心配しているというのも本当であるからです。この観念は宗教に関する全ての眺望を十分に明らかにしているのが分かります。人は神獣、前兆、神託そして私たちが今でも慎重に考えることに基づいている狂気の全てを理解しますが、そこに止まることは出来ません。世界の全ての戦士たちが行ったように、神託に挑まなければ

なりません。もしも信者が自分の神に相応しいなら、極めて明白に自らを否定する勇気を持った宗教の後に、別の宗教が次々に表れて来ます。そして最後のものになるまで全ての宗教を捨てなければならず、それが最も低い場所においても最も高くなるのであり、何時もそうやって行ったのです。そして諸宗教の系列において、最も私の興味を引いたのはその系列ではなく、寧ろ如何なる対象であっても私たちの思考において避けられない弁証法であったのを理解することでした。何故なら、〈自然〉の美しさは永遠の序章であり、叙事詩の賛美歌は永遠の発展であり、精神の崇高さは永遠の太陽であり、瞬く星空の下での静かな眠りは二行詩でしかない時、あるいは一文でしかない時、永遠の物語になるからです。先ずこれらの意味合いを耳が聞き、そして詩は思考よりも正確です。その様にして私は全ての神々を殺しました。そして全てを生き返らせることになったのです。というのも、未開人たちの思考が私たちの思考と絶対的に無縁であると主張することは非常に愚かです。根っからの愚かであり、私に言わせれば上品ぶっても愚かな様にさえ見えたからです。反対に私が先に言った人間嫌いを拒否したことで、私は未開人たちも私たちの様に見事に思考していたことを最初から憶測していました。この分析は直ぐに検証されました。もしも或る種の動物たちを育てて調教するのを仕事とする人々であっても、何か可笑しいことがあるのでしょうか。奇妙な形をした壺で食べるくらいなら殺される方が増しだとするのを別にしても、社会階級という精神はあらゆる形而上学的偉大さを持っています。私たちも他に何を作っているのでしょうか。私は、ヴォルテールの散文が人間を嘲笑するにつれて次第に人間の味方になることに気付きました。この様にして立派な行いは深部を切り開きます。（完）

私はこうして神々の方へ赴きました。沢山の道がそこへ導きます。あるが儘だった人間に腹を立てるのは、余りに時間の無駄です。如何なる基礎も無く無限に続く誤謬の連鎖という仮説は、それ自体が人間嫌いです。従ってずっと昔から私は、薔薇と収穫の祭りである聖体の祝日を嘲笑する者たちを嘲笑していました。但し、クリスマスに嘲笑する人は誰もおりません。私は屢々、祭の詩的な響きや舞踊の永遠性に注目していました。そして祈る動作は、花が咲く動きと同様に自然であることに私は何度も気付きました。更に、両手の動き、呟く言葉、跪くこと、そして十字を組む腕からなる実際のこの想像力をもっと詳しく分析すれば、私はそこに人間の平和の表現と、瞬間瞬間にしか実際に見出せないと信じるしかない来世への告知しか見ませんでした。私が、人間という現世の自然に全てを見出した時、超自然は虚構に思えました。私はそれを現実的に実証的に理解しました。地上の神々を考えるには非常に注意深かったコントの思索に、私は導かれました。そこからは何時も詩人によって案内された私は、聖書も調べました。私は人間以外のものはそこに何も見出しませんでした。少なくとも全てが人間なのです。

コントは崇拜を、本当の対象である人間に戻すために、多くのことを行いました。すると余りに高度な秩序を齎すものである、政治的群衆としての人間性をコントは理解しましたが、この〈偉大な存在〉を彼が取り戻した記念という遠い昔の意味によって「既知の存在で最も生き生きとしたもの」に仕上げることに成功しました。死者たちは生者たちを支配することを、私は理解することが出来ました。それは呪いしか伝えない遺伝の亡霊によるのではなくて、そこに最も相反するものがあるという観念によるものです。それは人間において最も純粹で最良のものですが、決して存在しなかったものであり、敬虔な心や賛美の心によって君臨するものです。極めて自然なこの観念は、あらゆる慰藉の主題になるものです。私はまさしくそれに根本まで従ったと信じますし、真の敬虔な心による手当てを受けない限りは、絶えず夜に彷徨うと言われている幽霊たちが分かるまで従ったとまさしく信じます。この例そのものは、全ての宗教を明らかにしてくれました。何故なら、大きな石の塊の下に死体を埋葬しなければならないとか、火で燃やさなければならないのは、衰弱して侮辱された死者の辛いイメージとか、錯乱した病人や震え声で話す老人の哀れなイメージも、それ自体の中で消して仕舞わなければならないことも意味しているからです。それは決して死者を正確に思い出すことではありません。それは百回も千回も殺すことです。全ての敬虔な心はそれ故にその力において、そしてその栄光において自ら出来る限り死者を蘇らせることにあります。私自身も、誰もがやるように両親や亡くなった友人たちへの美しいこの瞑想に耽りました。私も、誰もがやるように伝説を創りました。伝説とは、語られるのに価値があるものです。私はこの豊かな観念を涸渇させませんでした。でも、語る人の口や死者たちの美德を響かせる気配りを時々浮かび上がらせることには殆ど成功しませんでした。生者たちも同様でした。しかしあなたは、生者たちが自分自身への賛辞を、まるで振り払っているかのようであるのに気付いていたでしょうか。先ずは生まれつきの謙虚さから、そして私には大変に立

派と思われませんが他人が賞讃するような英雄の中には少しも存在しないという怒りから、振り払っているのです。悲しいかな。この自己認識はそんな風に話し、そんな風に悪魔のようなやり方で証言しながら死者たちを深く傷付けるしかなかったなら、悪人を生むようになるに違いありません。そうすると私は既に、最善のものを救うために、そして出来ることならその他のことは忘れるために、それは自分自身に対する一種の義務であると考えてるのが好きでした。それ故に、それは真の悔悟であると自分に言いました。その代わりに実を結ばない後悔は、自己の亡霊の中にあります。私はその様にして宗教の中心におりました。私は天国と地獄を生み出しました。多くの聖人たち、永遠なる父と母、そして許されたくもない悪しき息子たちも又理解しました。これらの炉端の観念は少しも偽善を含んでいませんし、集団化された社会の陶醉も無く、目覚めている観念です。これらの冬の物語が最も楽しくて最も容易な全ての私の思考であり、私が人間への温かさを掻き立てるものなのです。その時の私は、ミケランジェロが三角形の形式の中で刻んだ顔のように、永遠のテントの下にいます。私は、優しくはない自然の中で、私が選んだ訳もない仲間にも囲まれて、私自身の他には誰もおりません。『人質』のシーニュの卓抜な言葉によれば、その時の私は最も低い場所に座らされているのです。最早そこから降ろされ様がありません。その時は私の心の中の神々がやって来て、ホメロスが言ったように乞食に変装しているのです。その時は善良な砲手のジャンンは、アキレスにも匹敵しているのです。生者であった彼のことを私は殆ど知りません。けれども私は、彼を締め付けていた拘束もなく、奴隷状態もなく、現実的な力によって生きている彼を見ます。彼は生きていた時以上に、今も生きています。この様にしてどんな人も、その孤独のうちから英雄と永遠の神々を生みます。それではカエサルは、彼に何を生むのでしょうか。しかしながら彼の失った友が、彼にカエサルを説明します。それとは逆にカエサルの顔立ちが、パトロクロスとアキレスの友情が全ての友情を明らかにする如く、親しい英雄を照らし出してくれます。この様にしてここに沈む夕陽と微光の輝きや、煙と踊る影の中で、実際の煉獄と物語作者たちの天国への希望が生まれます。地獄に関しては、物語の中の悪人たちや食人鬼のように、見知らぬ人々だけがそこへ入れられるのです。この様に人間の宗教を家庭で静かに考えるために、私は歴史の魂から何かを取り除きました。カエサルやポンペイウスや全ての有名な人々、そして更に誰かを地獄へ投げ入れる危険はなかったのでしょうか。実を言えば私は、より一層身近でまさしく生気を蘇らせた人間の愛によって、彼らを救済しました。つまり敬虔の心が最初になければならない代わりに、それが最初にあつて欲しいと思うことの代わりに、そしてそれを大いに必要とする死者たちの全ての力を救済する代わりに、コントは私たちの偉大な祖先を美德一覧表によって愛するように促しているように思えることが時々あるということです。その様なものは私の〈影〉の王国でした。〈王座〉も〈統治〉も決してありません。カエサルは乞食でしかありませんでした。私にとっての神を見出すことなのです。

私は、何時も愛読書の一冊であつた『セント・ヘレナの回想録』を読みながら、この記念的な行いから試していました。下らない愚かな連中から（彼らは愚かなことを行なっていました）、「私はあなたがナポレオン支持者とは知らなかった」と言われたのです。私は決してナポレオン

支持者ではありませんでしたし、これからも決してそうではないでしょう。行列が通過する時に脱帽するのは私の性分に合いません。私が脱帽するのは次の日です。次の日とは、詩人が言うようにワーテルロー（1）のことです。セント・ヘレナのことであり、墓場のことです。それ故に、そこにいるのは乞食皇帝です。彼は書物によって私の処に来るのであり、最早私しかいないのです。少なくとも私には、書物の英雄は全てその様に見えますし、大変に影の薄い彼らを読者が生き返らせているのです。その時私は皇帝の様々な作品を取り上げて、炎と感嘆に溢れた人物で如何なる人物でも構わずに、その人物の中身を信じた稀有な人間の一人を構成していました。その稀有な人間の一人は宮廷人たちを裁いて、自分自身の宮廷を軽蔑したのです。「あなた方は何事にも後悔しない人間を見ているのだ」とナポレオンは追放された船上で、八月十五日の誕生日を哀れにもお祝いする時に言いました。彼自身は、誕生日のことを少しも考えていませんでした。何故この大問題についてテーヌが語った愚かなことが（彼は愚かを演じていました）、私に戦闘態勢を映して見るのか、十分にお分かりのことと思います。この人生に天国はありません。全てを信用してはなりませんし、全ての悪魔から身を守らなければなりません。悪魔はあらゆる信仰を取り除くでしょう。私たちが過去の軽蔑の上に未来を建設することはない、と私は確信しています。人間嫌いは正義の敵です。現在により良き正義を告げるものは何もありません。それどころか正義と希望が輝いているのは過去です。そこに私たちの弁証的思考のうちに、それ自身が極めて自然な黄金時代の虚構という名残の全てがあります。私が信じるものに、進歩は少しも入って来ません。私が見る処では、歴史よりも伝説の方に真実があるのは何故でしょうか。私は可能な限り説明します。それ故に私自身の裡や炉端で、あらゆる宗教活動が悠久の時代から信じることの全ての理由を持って来ることを、私はやり遂げているのです。しかし、この共通した踏み板への復帰は私には、黄金よりも貴重な貯えである全ての不信仰と一致させる助けになっていないのです。

私は新しい人間を思考しようと試みます。その人間は、つまり人間全体を理解して、騙されることなく希望を持つ人間です。自分を自由であると言う精神の人々は、殆どそこを通過して行きません。彼らは愛するものに一番良く似ている人や書物について、偽造や虚偽の疑いを投げかける以外に何をしようとするのでしょうか。この不快感は社会主義者、共産主義者、無政府主義者、あるいは言いたいように言って良いのですが、これらの人々の意識の中の至る処にあります。私はそんなにもカトリック的ではありません。キリスト教的でさえもありません。しかし私は、全歴史で一番輝かしい出来事を、私が既に述べた方法で祝うように主張します。それ故に私はそれを友として、敢えて言うなら敬虔な心で言うこともあるのです。私はそこに、出来る限り人間的なものを全て求めます。私は余りに滓しかないとしてそれらを投げ捨てます。私が投げ捨てると言う時、この動作は何時も慎重であるのを知って下さい。私は殆ど全てを救うこと、いや本当に全てを救うことに決して絶望していません。というのもローマ教皇の最も嫌な者も、私の兄弟としての人間であるからです。何故私は、有名な「無花果の季節ではなかった」を、無花果の福音書の物語において救ったのでしょうか。人間の信仰を、これ以上巧みに説明しているものは何もあ

りません。というのも、人間のどんな断片でもマザーグースの一つの物語でしかなかったとしても、少なくとも注意して聞くに値するもののように私には思われるからです。この敬虔な心は、発掘と廃墟を通して可能な唯一の道案内です。要するに、過去の時代を未開の時代として、そして昔の物語を不条理の蓄積として常に論じることは、出発から余りに間違っていると私は思っています。悲しいかな、もしも現代を人が間違っていて理解していたなら、何でも言えるのではないのでしょうか。従って人は、人間を改造したいのです。この意志は高貴なものです。私がここで呼び戻しているあらゆる理由と共に、彼は援軍としてコントの思想を持って来ます。それは、望ましい人間の変化は実際には非常に小さなものであるということです。

要するに、以上が理性による教義の吟味が私を導いた処でした。しかし私の前には、或る種の専門的問題が残っていました。というのも私は、英知よりも想像力の方が強く、そして正確に心を打つことに気付いていたからです。その点で私はヘーゲルに従って、ヘーゲルの芸術や宗教についての力強い思索を追いました。私が把握した大思想とは、宗教は芸術についての反省以外の何ものでもなく、その思想はヘーゲルの概要の中にありながら、屢々その展開において見失われているものです。それはかなり明白なものでした。寺院や彫像は大規模な文書のようにでした。正確に言うなら、人間たちが絶えず問いかけるスフィンクスの様でした。そして、神学は出来るだけその後を追いました。この観念はそれ自体が神話的です。そして、叙事詩的物語がその観念を齎すというのも一つの言い方です。しかしながら私は、この狂った想像力が如何にして理性によって規定され得るのかを理解しませんでした。想像力は私たちの内面に働きかけることが出来ます。そして別世界を創ることが出来るのを私が否定した時に、ようやく私はそれを理解することに近付きました。何ものかである恐怖と、何ものでもない幻覚をまさに束ねようとしながら私は、完全無欠なこの世には幻影も幽霊も不在であることしか見出さなかった時、神々、取分け小さな神々の近くにいました。対象の無いこの恐怖は、想像力による虚無によって眼に見えないものを創り出していました。しかし、それは余りに小さいものでした。真の想像力を事実にして、そして最も自然な歩みの中でさえも身に付けなければなりません。というのも芸術は屢々緻密であり、少なくとも神学者が語るものの中でも緻密であるからです。（完）

（1）ワートルローは、ベルギーのブリュッセルの南方にある町。一八一五年にナポレオン（一七六九～一八二一）は、英国・プロイセン連合軍に致命的敗北をした。

数年の間に二回程、大学は〈物語〉の学課を女子の授業計画に入れました。それは表面上は誠に美しいのですが、壁のように閉ざされています。狂った想像力にびっくりさせられた時は、既に経験によって規定されることはなく、このことは言うまでもないことでした。子供は、理解出来る対象について絶えず熱心に積極的に学ぶのに、このありそうもない物語を何故信じるのでしょうか。でも、信じているのでしょうか。そして私自身が、ペローやグリムや『千夜一夜物語』を読み返してみる機会を持ちましたが、何と興味深いことだったのでしょうか。こんなにも骨の折れる主題は、私には稀有なことでした。奴隷とか弱者がこの世を忘れようとしたり、自分自身を奇跡でうっとりさせようとしたりするのを私は良く理解します。この安易な推測は、それで詩も解釈したくなりますが、感動も様式もありません。何時も私には退屈に思えました。そこには世界が欠けているのであり、全てが欠けているのです。詩はその様にして至る処にあり、如何なる散文よりも真実に近いものです。そして奴隷の詩である寓話は、苦い経験に酔い、あらゆる幻想を追い出している様に何時も私には思えました。物語も私には同じ力があるように思いましたが、その意味を推測することは出来ませんでした。

私はコントの思想によって先ず当惑から脱け出しました。その思想とは、驚異は愛情の世界を如何なる方法でも少しも悪く変えなかったということです。『イリアス』や『オデュッセイア』の神々は、それ故に心の支配者ではなくなるでしょう。そして事実、自分の家の煙のことを考えただけで死にたくなつたユリシーズの後悔は、神々から来たのではなく、ペネロペの貞節も神々から来たのではありません。アレスの怒りも同様で、寧ろ神々は何も出来ないということがお分かりになるでしょう。しかしながら、詩は屢々創作と混じり合い、最初の源泉から遠く離れ、コントの思想も頼りなくなります。一種の媚薬の効果であつたデイド(1)の恋愛や、もっと適切に言うなら外からの奇跡によって始まるトリスタンとイズー(2)の愛のことを人は考えます。従つて私は、この様な二次的な詩が好きではありません。神話はこの時、現実を引き裂きます。『殉教者たち』(3)における天国の情景以上に冷淡なものは何もありません。私は詩に関して、全く違う観念を創り上げます。それは現実に最も近い人間や世界の歌の様に思えますし、詩人の現実の知覚を理解します。それによって私は、最も微妙な隠喩が詩人に提示している事物になり、詩人によって素晴らしく描かれた事物になることを何時も心に描きます。しかし私はこの手強い分析を、この状態で止めて置かなければなりません。物語の話に戻ります。そこに私は、呪文から何時も守っている感情の宝庫を見出しました。そしてこの側面から考えて見ると、善人と悪人という子供っぽい区別も、何かの真実を表している様に思いました。つまり出来事は殆ど人間を変えないということです。そして、それは青い鳥や白い雄牛によって、殆ど荒々しく表されています。どちらも動物の外観に基づいて忠実なのです。ここから出発して私は、もう一つの別のことを発見しました。つまり人間は人間にとって大きな障害であるということです。人間は、障害物や距離や仕事を上手く熟します。忍耐しか必要ではありません。しかし、人間のことは上手く

始末がつけられません。戦争を見れば良く分かることです。従って魔法の絨毯の話は、人間が人間を邪魔しなければ旅行が迅速に行えることを大変に良く表していました。それとは逆に、全ての魔法使いや鬼婆は自由に命令するための力を表していました。何故なら大地が全ての壁や障害物に占領されていて、勇気があっても何も出来ないのは本当であるからです。人は忠実になるしかありません。この物語の世界は余りに行儀が良いのです。私が先ず最初に見出したのは以上のことです。

私が二番目に試みた結果、ついに私の眼前にあったものを理解するようになったのは、即ち子供の最初の生活が魔法使いや鬼婆の言いなりになることです。それらは同時にあらゆることが出来ますが、あらゆることの邪魔もします。子供は全くこの実証的経験に従って最初の観念を形づくりします。この様にして私は、私たちの最初の概念が全く神学的であるコントのもう一つの思想に、より多くの実体を与えました。しかし子供の生活をより詳しく追ってみると、私は持ち運ばれたり、あちらこちら転がされたり、戸や窓の犠牲になってお祈りにより全てを手に入れる子供を通して、物語の隠れた部分をもっと適切に理解出来ました。昔の世界においては、昔は確かに少しも働かなかったのは本当で、それが黄金時代を意味しています。しかし、ここでも全てが黄金ではないのです。待たなければなりません。人から好かれなければなりません。不可解な意志に服従しなければなりません。その様にして、物語の中で戯れるように見える想像力は、私たちの最も古い経験を大変正確に描き出しているに過ぎません。更に私たちは、若者たちを殆ど理解しないであくまで若者たちに逆らおうとする歳取った人々のことを考えてやらなければなりません。それ故に神学全体が私たちの前に立ちほだかっている、真実味を持っています。何故なら人々は神々を愛しているからですが、それでも屢々他のものであつて欲しいと望んでいます。人々が学んで企てるに応じて、神々から解放されるのもやはり真実です。そこから昔は神々がいたが、今は去ったという自然な観念が生まれます。何時もそんな風でした。最も近代的な宗教も古い奇跡しか当てにしません。その場所は神々のために作られたのであり、人間の形を作る場所でもあります。私は改めて理解したのですが、もっと適切に言うならそれは記念するという事です。厳かな死者たちが生前に行っていたのと同様に、事物の上にも君臨し続けているということです。

しかしながら私は、宗教の全段階を未だ把握していません。神々は愛せられているのと同様に、恐れられてもいます。少なくとも恐怖の分析は、愛の分析よりも大変容易に行えます。ご存知の様に、恐怖の最初は恐いと認識することではなくて、寧ろ肉体の震えであり動揺です。そしてこの恐怖そのものが私たちを恐くさせるのです。そこから私は、山や森に出て来る形もなく眼にも見えない神々を訳もなく説明しました。想像力は見ているつもりでも、何も見ていません。あるいは神は極めて現実的なものです。それは走って逃げるのろ鹿です。何時間も森の中を独りで彷徨わなかった人々は、想像力の思いがけない喜びも良く知りません。私は二十歳の頃に、狩猟家の友人と一緒に、時々ウール川の源流付近にある誰も住んでいない農家で、狩りはやらずに一か月間過ごしに行きました。その地は森と池だらけです。人と出会うことも殆どありません。歩

いて行くと木の幹が幾つも現れて来て、一度見ると二度と見ることもなく、その場所が隠れて仕舞うような結果になるばかりです。子供たちにとっては、この孤独に我慢出来ません。青年はそれに慣れますし、大人はそれに本当の恐怖を決して感じません。どちらかと言えば大人は望んだなら、恐怖を十分に感じるだろうと思っています。信じることから信じないことへ絶えず動いて行くのが、田園の宗教の特性です。そこには事実、それ程恐ろしい神々は決しておりません。森が絶えず消え、彷徨う人と動物が全く自然に混合することは、結局お馴染みの怪物しか生みませんでした。その典型がアイギパン(4)です。動物に神秘があるということは、狩をしたり身を守ったりする者の裡には殆ど気付きません。寧ろ動き回らない家畜に大変近くなったり遠くなったりしていると気付くことが理解されます。これらの考察から、神々が生理学的に論じられ得ることを私に示してくれました。(完)

(1) デイドは、ギリシア・ローマ神話ではフェニキアのテュロスの王女で、カルタゴ市を建設した。トロイアの勇者アイネイスとの恋に破れ、自殺したと言われる。

(2) トリスタンとイゾーは、ケルト伝説に基づく中世恋愛物語。

(3) 『殉教者たち』(一八〇九)は、シャトーブリアン(一七六八～一八四八)が聖地訪問した成果としての作品の一つである。

(4) アイギパンは、半分が人間で、山羊の脚と角を持った半獣神。

最早、順序を見出すしかありませんでした。そして年齢が私に課したのは、子供の宗教の様なものである〈物語〉から始めることでした。しかし〈物語〉に大変自然な、神人同形説であるが故に不都合が無くもなかったのは、人間の形をしている場合でも崇拜されるのは何時も動物である田園の宗教において少しも確かなものがなかったことです。何故でしょうか。農民や家畜飼育者の全ての思考を占めているのは、多産性であるからです。しかしながら伝統の力によってここで、より一層確かになる祖先崇拜をそこに入れる必要があります。というのも幾つもの原因がそっくり隠されていて、長い期間の修行時代においては年長者が最も良く知っているからです。しかし他方では、ヘーゲルが指摘した様に、都会の正義に釣り合わない家族的宗教は四季の暴力や愛の残忍さという性質を持つ様になるに違いありません。そこから家庭の悲劇や容赦のない復讐が生まれます。ここには魔法使いや神託が支配しています。ヘーゲルは最も古い神々を、まさに泥と血の神々と命名しました。もしも戦争と征服の秩序を田園の野蛮と比較するなら、都会に固有のそれらは正義を表しているのです。但し、私はヘーゲルを読んで理解して行ったのに応じて今は豊かであり、重大な間違いもありません。そして明白な真実において、文明の歴史は神話的那のものであるということです。何故なら農民の暴力は何時も同じでしたし、今でも同じであるからです。平原の中央には常に一つの町があり、境界線を立てるために測量師と判事がいましたが、法律と測量を軽蔑する代わりに聖人がおりました。バビロンの地には略奪する羊飼いたちしかおりませんし、カルタゴの地も同じ様なものである如く、私の眼から見ると進歩とは、どちらかと言えば次々に反復する動揺の繰り返しの様に見えます。それでも、これらの略奪者の家では、ホメロスに見る様に未知の人を歓待する決まりが、怒りよりも上位にあります。そして最も重要なことは、都市によって定められる文明が田園の情熱を多く弱めることはなく、あらゆる段階の全ての錯乱における愛の陶醉は最も注目すべきものであり、今なお罪の源泉になっています。従って二千年か三千年に限定して進歩の曲線を描くなら、既に人間性を裏切っているので、革命における過度の残虐さも恐ろしくて残酷な夢想の様に見えます。ですから歴史哲学は、私の好みに合う程十分に生理学的ではありません。しかもその主題が何度も叩かれて、屢々私たちの努力も先に延ばすことで終わるのは、人類の平和が恐らく千年かそれ以上の忍耐が求められていることを何度も理解させられているからであると私は判断しています。それ故に、既に一度言ったことを再度言うのですが、私は様々な宗教を人間の進歩の段階ではなくて、人間という地層の一時期として考察することを選択したのです。そして歴史が議論して敷衍されることはなく、反対に私は簡潔になって人の心を打って欲しいと思いました。何故なら私が創りたかったのは人の肖像だったからです。例えば戦争は、人の品性の進歩で終わるというのではなく、反対に戦争は現在も過去もそうである様に、将来も常に脅威を感じさせるものであるということです。如何なる道徳も正義もその時その時は同じなのですが、そうでないと人は嘲笑します。恐らく私は、読者がその存在の全てを支えている一瞬を忘れることが可能にならないと、様々な層の人々に感動

し心を打つための意図を十分に説明しなかったこととなります。

しかし私は、もう一つ別の目的に狙いを定めました。何故なら知識への全ての道は、最高の知識でさえも私たちの先人たちは直近の先人も例外なく、私たちよりも愚かであったという観念に占められていると私は理解したからです。真実のためには新しい観念しか受け入れないこと、そして古いものに間違いを見付けることに優れた人々は、先ず夢中になりました。自らその様に信じる故に、本来の近代になるというその精神は全てが、人間的精神への一種の礼拝である文化には深く対立する内容のものなのです。そしてこの狂った歴史の迷信は、軽蔑するためにしか書かれず、取分け宗教の同じ歴史において示されています。そして何時も古代の信仰には先入観を持っていて、何時も人間の代わりに野生的で素朴な動物を見出そうと焦っていました。それは、虐殺や火刑や宗教戦争の全ての恐怖を、十字架に架けられた人々への崇拝や聖母マリアや直進する聖人たちによって説明したいのです。それは極めて明白に、力による錯乱に反対することです。そして私たちの周りや極めて近くにも同じ激昂や責苦がある如く、私たちの周りにも同じ信仰が同じ形でありますし、こう言って良ければ同じ祈りがあります。ところが理性を持った友人たちは、全く純粋な信仰や火刑に対して同じ激昂から苛立ちながら、私には終わりの見えない根拠のない弁証法を余儀なくします。そして彼らは自分自身で、イエスは最後の審判に臨んで、その年には魂の平等を教えませんでしたし、その時の思想はイエス独自の政治と同じ魂であることを証明しようとするまでは盲目になっています。この思想が空想的で、もっとはっきりとそしてもっと良き正義を齎す以上に慎重に言うなら、利己主義によるものであると主張したいなら、まだ幸いなことです。その時は私が思考と感情の矛盾を感じながら（恐らく、私自身の裡も同じです）、それは動じない反抗を表して、私たちがそこから出発することはありません。安らぎを求めて教会へ行くあらゆる善良な女性たちに、そしてもっと正確に言うなら私たちが終わりにしたい、まさにその不正を自ら告白するあらゆる善良な女性たちに私たちはどれ程の同盟者を失っていることでしょうか。政治家たちもこの混乱を演じるべきではありません。私たちに反対して演じているのは私たちであり、私たち自身です。

それでは私は、この善良な女性たちに従うこと、ロザリオの祈りを言うこと、ミサとかその種のものを言って貰うことを勧めるのでしょうか。決してそうではありません。私は何時もそれに抵抗しましたし、内部的にも如何なる疑いもありません。何故ならまさしく私は、この教義の真実と儀式の真実さえも見えていたからです。人々が弱さからにしろ感情からにしろ、どちらかと言えば明らかに不当ですが私たちに固有の英知への不信からにしろ、それを信用するにしろ、私たちの壊れやすい文明が、少なくとも宗教の真実がそれを信じる人々には見えさえすれば、私に何か恐れるものがあるだろうとは思えません。何故なら、天国や地獄や魂の救済を文字通りに信じることは、それが不条理で人間の及ばない処のものであるとしても、宗教は自由であると判断することだけは危険であるからです。というのも、そこでは全てが奇跡で全く理解出来ず、全てを剥ぎ取られた聖人たちの陶酔と、剥ぎ取りに行く政治家の陶酔との区別は最早無いからです。更に、他の陶酔に関しても同じです。汚れた愛に基づく商人の寛容も同じです。狂信を認識し

なかった者は、兄弟の中で最も高邁な人々も認識しないし理解もしないと私は言います。そして以上は、教義の歴史や記録への批評によって神秘を反論することは非常に間違った努力であると私には思える理由なのです。実際にスコラ哲学に反対するスコラ哲学も、常にスコラ哲学なのです。イエスがそう命じたからと言って私たちが兄弟であるのを望む者も、イエスが存在したことを証明もしなかった故に私たちが兄弟であるのは本当ではないと証明する者以上に盲目ではないと私には思えます。この激論は終わりにしなければなりません。恐らく、饒舌を提供する豊かな道によるしか続かないでしょう。私としてはユゴーの驢馬の様に、何千冊もの本は時間と努力を無駄にしていると考えます。確かにユゴーには、全てのものをすっかり和解させる巨大な努力は正しいのです。もしもそれが自然やリズムや行進、あるいは舞踊や歌への陶醉によって恐らく齎されただけであっても、詩人であるユゴーは親密な汎神論によって神々との結合を修復するでしょう。それは欲望を神格化することであり、全てに口づけすることです。でも、散文はユゴーにおいてももっと一層慎重です。

私が何処へ行くかは明らかです。しかし、その実行は容易ではありませんでした。表面上の尤もらしい考察には耳を塞いで聞こえない振りをしなければなりませんでした。私が述べた計画に従って、組合員教師の雑誌に宗教哲学を毎日規則正しく書き始めました。彼らは大変な疑念の中でこれらの頁を読んだのであろうと私は推測しますが、それは少しも読んでいないことなのです。それに私は、殆ど無いことですが教育学のことも書きました。しかしそれは、私には凡そ狂っている様にしか見えない所謂近代的な教育学とは一致しないものです。何故私は、子供が先ず最も堅苦しい詩で少しも子供らしくないものを暗誦して欲しいのか、そして何故私は、精神の品位を落とすだけの娯楽的な学問よりもこの礼儀正しくて気品の高い朗読者の方を上位に評価するのか、私の本を注意して読んだ人々なら良く理解することと思います。でも、それは何でしょうか。私の最も大切な友人たちにお世辞を言っているのでしょうか。いいえ、そうではありません。私は只、彼らと一緒にいるだけです。少なくとも彼らはそのことを良く知っています。

その当時（一九三〇年頃）、女子校のセヴィニエ校での講義が一般にも公開される様になりました。私はもう一度〈神々〉の大問題を、ぎっしりと詰まった真剣で忠実な聴講者の前で組み立て様と試みましたが、聴講者の中から多少の例外は除きました。何故なら流行を追う人も混じっていたからです。必然的にこの種の教育は終わりが見えていますし、それに大した成果もあり得ません。それで自由な時間を前にして直ぐに私は、最長でも毎朝二時間、人々が眼にしている『神々』を書き上げました。どんなに人々が明瞭に理解するのが難解であっても、私は何一つ変えたくありません。というのも私の目的は、沢山の教義に一つの教義をつけ加えることではなかったからです。反対に全ての教義と対抗させて、私の縁取りを切り立たせることにあったからです。その時には、私はもう一冊の本も許して貰えるでしょうが、この本はここで終えることにします。そしてこの本を、慎重さと友情で溢れた『神々』の長い序文と受け取って戴くだけで十分です。

一九三五年七月～九月 ル・プルデュにて  
(了)

## 訳者あとがき

---

この翻訳は、Alain, *Histoire de mes Pensées* (1936) の全訳である。テキストとしてはAlain, *Les arts et les dieux* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958 に所収されているものを使用している。我が国における本書の翻訳は既に何冊かあるが、アランの思想を斟酌しながら新たに出来るだけ丁寧に翻訳することは、アランの思想を探究したい私にとっての長年の課題であった。

又、アラン（一八六八～一九五一）ことエミール＝オーギュスト・シャルティエ（本名）についての伝記を書くことを或る友人から勧められたのだが、アラン自身も言っている様に、私的なこと、家族や家庭のことを自ら書くのを嫌っていたため、私がアランの伝記を書くことは不適當の様に思われた。更に、アラン作品を読めば読む程、不思議なことにアランの生涯を詮索したり検証したりする好奇心も失われて行くのを感じた。従って私の出来る範囲として、アランの思想と精神にとっての伝記ともいえる本書を翻訳することで、その友人に伝えたいと思う。

この翻訳は当初、パプーの電子書籍の同人誌「風狂」において二〇一四年八月から毎月公表して来たものである。翻訳するに当たり、森有正氏（一九五一）及び田島節夫氏（一九六〇）の優れた訳書を参考にしたが、これらの先人たちから多くの教示を授かったことに感謝申し上げます。

そして、この翻訳を通して読者諸氏が、真の幸福と本物の正義を探求し続けたアランの生涯を理解し味わい、現代をより良く生きる機縁にして戴ければ、訳者としてこれ以上の喜びはないと思っている。

二〇一七年五月吉日

東京西郊「たまプラーザ」の寓居にて 訳者記す

アラン  
わが思索のあと（下）

2017年5月19日登録終了

<http://p.booklog.jp/book/106534>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106534>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106534>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ